KYOTO UNIVERSITY HOSPITAL

京都大学医学部附属病院

GUIDANCE

基本理念

1. 患者中心の開かれた病院として、安全で質の高い医療を提供する。
2. 新しい医療の開発と実践を通して、社会に貢献する。
3. 専門家としての責任と使命を自覚し、人間性豊かな医療人を育成する。

患者の権利に関する宣言

本院は、医の倫理と病院の理念に基づき、患者の権利を尊重します。

1. 人としての尊厳を保ちながら、良質の医療を受ける権利
2. 充分な説明と情報提供を受け、自らの意思で治療法などを決定する権利
3. 個人に関するプライバシーを保護される権利

CONTENTS

目次 ―― 01
病院長挨拶 ―― 02-03
沿革 ―― 04-05
病院機構図 ―― 06-07

各診療科のご案内
内科　血液・腫瘍内科／内分泌・代謝内科 ―― 09
循環器内科／消化器内科 ―― 10
呼吸器内科／呼吸管理睡眠制御学 ―― 11
免疫・膠原病内科／老年内科 ―― 12
糖尿病・栄養内科／初期診療・救急科 ―― 13
神経内科／腎臓内科 ―― 14
外科　消化管外科／乳腺外科 ―― 15
肝胆膵・移植外科／小児外科 ―― 16
眼科／産科婦人科 ―― 17
小児科／皮膚科 ―― 18
泌尿器科／耳鼻咽喉科 ―― 19
整形外科／精神科神経科 ―― 20
歯科口腔外科／放射線治療科 ―― 21
放射線診断科／麻酔科 ―― 22
脳神経外科／形成外科 ―― 23
心臓血管外科／呼吸器外科 ―― 24

中央診療センター等のご案内
検査部／手術部 ―― 26
放射線部／リハビリテーション部 ―― 27
デイ・ケア診療部／医療器材部 ―― 28
輸血細胞治療部／分子細胞治療センター ―― 29
周産母子診療部／人工腎臓部 ―― 30
病理診断部／疾患栄養治療部 ―― 31
集中治療部／内視鏡部 ―― 32
臓器移植医療部／デイ・サージャリー診療部 ―― 33
遺伝子診療部／感染制御部 ―― 34
外来化学療法部／心臓血管疾患集中治療部 ―― 35
女性のこころとからだの相談室／新生児集中治療部 ―― 36
高度治療部／医療情報部 ―― 37
看護部 ―― 38
薬剤部 ―― 39
探索医療センター ―― 40
地域ネットワーク医療部／治験管理センター ―― 41
医療安全管理室／総合臨床教育・研修センター ―― 42
診療報酬業務センター／医療開発管理部 ―― 43
がんセンター ―― 44
先端医療機器開発・臨床研究センター／リウマチセンター ―― 45
病院運営企画室／事務部 ―― 46

院内施設のご案内 ―― 48-49
構内配置図 ―― 50-51
交通機関のご案内 ―― 52

■病院長挨拶

京都大学医学部附属病院 病院長　三嶋 理晃

京都大学医学部附属病院概要の発行にあたり、ご挨拶を申し上げます。

京大病院は1899年に開設され、本年で112年目を迎えます。病院開設当時は内科・外科・耳鼻科・産婦人科・小児科・皮膚科・眼科の７科でしたが、歴代の病院長をはじめとした各職員のご尽力で、現在では31科・1,121床・職員約3,000人を有する特定機能病院に成長しました。

2004年国立大学が法人化し、独力で経営責任を有することが明確化され、その後、各病院が経営努力を続け、様々な意味で病院は新しい体質に脱皮しつつあります。

法人化を契機に、京大病院は３つの基本理念を掲げました。(1)患者中心の開かれた病院として、安全で質の高い医療を提供する、(2)新しい医療の開発と実践を通して、社会に貢献する、(3)専門家としての責任と使命を自覚し、人間性豊かな医療人を育成する、です。これらの理念の実現を引き続き目指して努力していきます。

診療面に関しては、京都大学には多くの優れた医療資源があります。総合大学として全国に先駆けて設置した「がんセンター」は、各診療科が共同して横断的に診療するのが特徴で、各臓器で内科・外科・放射線科が合同してユニット外来を行っており、積貞棟1階の外来化学療法部と２階の集学的がん診療病棟とが結束してがん治療にあたっています。

また、「がん」を宣告された当初から精神的・身体的なケアにあたる、がんサポートチーム（緩和ケアチーム）も、好評を得ています。

その他、「臓器移植チーム」は、肝移植など腹部臓器移植で多くの実績を上げてきました。この数年、肺移植が多くなり、優れた成績を残しています。また、心臓移植開始も間近に控えています。2010年の改正臓器移植法の施行に伴って脳死移植が急増しつつあり、移植コーディネーターの確保などの問題を検討中です。さらにiPS細胞研究所と連携し、将来に向けてのiPS細胞バンク作成を目指して「iPS細胞診療部」を発足させます。

教育面に関しては、学部教育と初期研修教育の整合性の確保、近々予想される初期研修医定数の激減への対応、若い医師の関係病院間の円滑なローテーションの確立など多くの課題がありますが、医学教育推進センターを中心として、医学部と一体となって対処しつつあります。

研究面に関しては、産官学連携のシステムをより強化することと、臨床研究の推進をよりしやすくするシステムの構築という２つの重要な課題があります。これに対して、探索医療センター・EBM研究センターの機構改革を進めつつあります。さらに、先端医療機器開発・臨床研究センターをその拠点として活用いたします。

経営面では、法人化以降厳しい経営状況が続いておりましたが、病院収入の増加等により経営が安定しつつあります。今後、この経営の安定化を持続し、患者や職員のアメニティの向上等を進めていくこととします。

京都大学医学部附属病院は
四季折々の美しさと歴史と文化に満ちあふれた街·京都で
真摯に医療の発展に取り組んでおります

今後も、病院を取り巻く環境は予断を許しませんが、京大病院には大きな強みがあります。それは、京大病院の各診療科が一流のスタッフ陣から構成され、優秀なメディカルスタッフ·事務職員がいることです。職員一同が力を合わせて京大病院のさらなる飛躍を目指します。皆様におかれましては、今後ともご支援·ご鞭撻の程、よろしくお願い申し上げます。

三嶋　理晃
Mishima,Michiaki

■沿革

創立から昭和前半

明治30年	6月	京都帝国大学設置の勅令が交付され、分科大学として医科大学を置く旨制定される
32年	7月	医科大学開設、医学科設置(内科学2講座・外科学2講座)
	9月	医科大学附属医院看護婦見習講習科開設(大正5年3月17日 看護婦講習科に改称)
	12月	医科大学附属医院開設、内科および外科の診療開始
		医科大学附属医院規程制定
34年	9月	婦人科、産科診療開始(明治34年6月　婦人科学産科学講座設置)
		内科観察室(昭和4年4月1日　隔離室に改称)業務開始
35年	4月	眼科診療開始(明治34年6月　眼科学講座設置)
36年	1月	小児科診療開始(明治35年5月　小児科学講座設置)
		皮膚病黴毒科診療開始(明治35年10月　皮膚病学黴毒学講座設置)
		耳鼻咽頭科診療開始(明治38年3月　耳鼻咽頭科学講座設置)
37年	3月	精神科診療開始(明治35年9月　精神病学講座設置)
39年	6月	整形外科診療開始(明治39年4月　整形外科学講座設置)
42年	4月	狂犬病治療研究室設置
	5月	内科学第三講座設置
44年	10月	医科大学附属医院産婆養成科設置

戦争、そして戦後期へ

大正 8年	2月	帝国大学および学部が制定され医学部設置
		医科大学附属医院を医学部附属医院に改称
11年	3月	看護婦産婆養成所設置(看護婦講習科および産婆養成科廃止)
12年	4月	癩特別研究室設置
昭和 2年	7月	外科学および整形外科学研究室ならびに手術場竣功
6年	3月	婦人科学産科学教室および病舎竣功
8年	5月	食餌療法研究室設置(昭和13月7月1日　栄養治療室に改称)
9年	3月	耳鼻咽頭科教室および病舎竣功
	7月	泌尿器科診療開始(泌尿器科学講座設置)
13年	6月	癩特別研究室を皮膚特別研究室に改称
	11月	中央レントゲン室を理学的診療室に改称
18年	5月	歯科診療室設置(昭和24年5月　口腔外科学講座に改称)
19年	8月	理学的診療学講座設置
20年	4月	医学部附属医院厚生女学部(看護婦養成施設)設置
22年	9月	京都帝国大学を京都大学に改称
23年	5月	医学部附属医院厚生女学部に専攻科設置
24年	5月	新制京都大学が発足、医学部附属医院は医学部附属病院に改称
		看護婦養成施設は医学部の附属となる
		口腔外科学講座設置、理学的診療学講座を放射線医学講座に改称
26年	3月	看護婦養成施設を看護学校に改称
		医学部附属病院厚生女学部専攻科を廃止、医学部附属看護学校に改称
27年	9月	医学部附属看護学校助産婦科設置
29年	4月	医学部附属看護学校助産婦科を医学部附属助産婦学校に改称

戦後から高度経済成長期、昭和後半へ

31年	4月	麻酔科診療開始(昭和30年7月　麻酔学講座設置)
32年	4月	皮膚特別研究室を皮膚病特別研究施設に改称
33年	2月	中央診療棟竣功
34年	4月	事務部に管理課、業務課の2課を設置
		医学部附属の学校施設として、衛生検査技師学校設置
37年	4月	薬剤部設置
39年	3月	外来診療棟竣功
	4月	脳神経外科診療開始(脳神経外科学講座設置)
41年	3月	第一病棟竣功
		ヒューマン・カウンター室設置
42年	3月	ベータトロン照射室、高圧酸素治療室完成
	4月	老年科診療開始(老年医学講座設置)
	6月	検査部、手術部、放射線部、救急部、材料部設置
43年	7月	人工腎臓室業務開始
	8月	未熟児センター業務開始
	12月	医療法承認病床数1,100床になる
44年	4月	理学療法部設置
45年	3月	外科系総合病棟およびサービスサプライ棟竣功
	5月	中央情報処理部設置
47年	4月	医学部附属臨床検査技師学校(3年制)設置
48年	3月	衛生検査技師学校廃止
	4月	輸血部設置
49年	4月	事務部が総務課、管理課および医事課の3課制となる
		医用材料学講座設置
		分娩部設置
50年	4月	助産婦学校廃止、医療技術短期大学設置(看護科、専攻科助産学特別専攻)
51年	5月	看護部設置
	10月	形成外科診療開始(昭和62年5月　形成外科学講座設置)
		狂犬病治療室を小児予防接種治療室に改称
52年	4月	看護学校廃止
	10月	核医学科診療開始(昭和51年4月1日　核医学講座設置)
53年	3月	RI診療棟竣功
	4月	医学部附属臨床検査技師学校廃止
	10月	人工腎臓室を人工腎臓部に改称
55年	3月	ライナック治療室竣功
	4月	病理部設置、医用材料学講座廃止、医用高分子研究センター設置
	9月	神経内科診療開始(昭和54年4月1日　神経内科学講座設置)
56年	4月	栄養治療室を病態栄養部に改称
57年	3月	ベビーサイクロトロン室完成
	4月	心臓血管外科診療開始(昭和56年4月1日 心臓血管外科学講座設置)
		中央情報処理部を医療情報部に改称

KYOTO UNIVER

昭和後半から平成へ

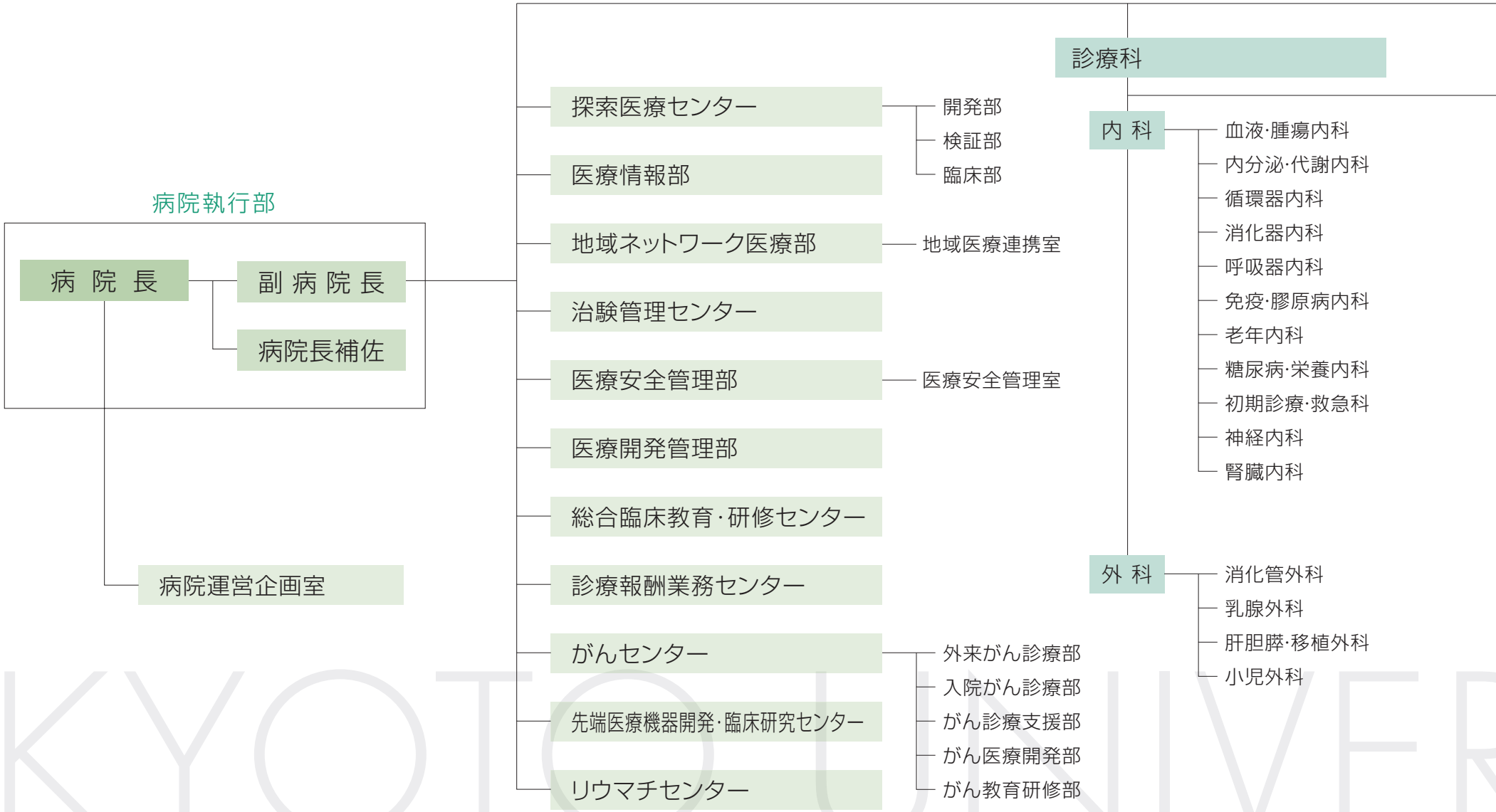
58年	12月	放射線部に放射線治療部門を設置
59年	4月	臨床検査医学講座設置
60年	3月	MR棟竣功
		皮膚病特別研究施設廃止
	4月	分子病診療学講座設置
61年	4月	集中治療部設置
62年	10月	第一臨床研究棟竣功
	11月	内科系総合病棟竣功
63年	3月	精神科神経科棟竣功
	6月	医療法承認病床数1,080床になる
平成元年	5月	デイ・ケア診療部設置
2年	6月	脳病態生理学講座設置、医用高分子研究センターを生体医療工学研究センターに改称
3年	4月	光学医療診療部設置
4年	1月	中央診療施設棟、第二臨床研究棟竣功
	4月	臨床代謝栄養学講座設置
5年	4月	総合診療部設置
6年	8月	医療廃棄物焼却炉竣功
7年	6月	病棟名変更（内科系総合病棟を北病棟、外科系総合病棟を南病棟、精神科神経科病棟を西病棟にそれぞれ変更）
8年	4月	院内学級開設
		消化器内科診療開始（平成6年6月　消化器病態学講座設置）
		病態栄養部診療開始（平成6年6月　病態代謝栄養学講座設置）
		移植外科診療開始（平成7年4月　移植免疫医学講座設置）
9年	4月	ボランティア制度導入
10年	4月	胸部疾患研究所附属病院と統合（病棟の名称は南西病棟とする）
		呼吸器内科診療開始
		感染症科診療開始
		呼吸器外科診療開始
		大診療科制の導入により、第一内科、第二内科、第三内科、消化器内科、呼吸器内科、感染症科は内科に、第一外科、第二外科、移植外科は外科にそれぞれ改称
		事務部が総務課、管理課、医事課および企画室の3課1室制となる
		医療法承認病床数1,240床になる
11年	4月	臓器移植医療部設置
	8月	外来診療棟竣功
12年	1月	デイ・サージャリー診療部設置
	1月	新外来診療棟にて臓器別診療体制により診療開始
	10月	地域ネットワーク医療部設置
13年	3月	遺伝子診療部設置
	4月	探索医療センター設置
		副病院長制度導入
		医療安全管理室設置

新しい世紀から現在へ―

14年	7月	老年科、神経内科を内科に統合し、内科の専門診療科として血液・腫瘍内科、内分泌・代謝内科、循環器内科、消化器内科、呼吸器内科、免疫・膠原病内科、老年内科、糖尿病・栄養内科、総合診療科、神経内科、腎臓内科を設置
	10月	ME機器センター、分子細胞治療センター、感染制御部を設置
	12月	治験管理センター設置
15年	1月	卒後臨床研修センター設置
	3月	中央診療部門を統合再編し、中央診療センター設置
	4月	病院長補佐制度導入
		経営企画部設置
		女性のこころとからだの相談室設置
	10月	外来化学療法部設置
16年	4月	医療開発管理部設置
	6月	看護実践開発センター設置
	10月	新病院整備推進室設置
17年	4月	病院執行部設置
		総合臨床教育・研修センター設置（看護実践開発センター廃止）
		事務部が総務課、経営管理課、経理・調達課、医務課、医療サービス課の5課制となる
	4月	病院運営企画室設置（経営企画部廃止）
	10月	医療法承認病床数1,220床になる
	12月	黄斑疾患治療センター設置
18年	4月	敷地内全面禁煙の実施
		事務部に新病院整備推進室を設け5課1室制となる
		診療報酬業務センター、外来事務センター、安全衛生管理室を設置
		外科の専門診療科として消化管外科、乳腺外科、肝胆膵・移植外科、小児外科を設置
		放射線科、核医学科を統合再編し、放射線科として、放射線治療科と放射線診断科を設置
	6月	心臓血管疾患集中治療部設置
		医療法承認病床数1,182床になる
19年	4月	中央診療センターの見直しにより、産科分娩部が周産母子診療部に、病態栄養部が疾患栄養治療部に、理学療法部、デイ・ケア診療部がリハビリテーション部に、光学医療診療部が内視鏡部に、病理部が病理診断部に、分子細胞治療センターが輸血細胞治療部に、材料部、ME機器センターが医療器材部に再編
		がんセンター設置
21年	1月	デイ・ケア診療部を設置
22年	3月	積貞棟竣功
	12月	南西病棟廃止
23年	1月	医療法承認病床数1,121床になる
	2月	高度治療部設置
	4月	先端医療機器開発・臨床研究センター設置
		リウマチセンター設置
	6月	先端医療機器開発・臨床研究センター竣功

RSITY HOSPITAL

■ 機構図



KYOTO UNIVER

- 眼科
- 産科婦人科
- 小児科
- 皮膚科
- 泌尿器科
- 耳鼻咽喉科
- 整形外科
- 精神科神経科
- 歯科口腔外科
- 放射線科
  - 放射線治療科
  - 放射線診断科
- 麻酔科
- 脳神経外科
- 形成外科
- 心臓血管外科
- 呼吸器外科

中央診療センター

- 検査部
- 手術部
- 放射線部
- 救急部
- リハビリテーション部
- デイ·ケア診療部
- 医療器材部
- 輸血細胞治療部
- 周産母子診療部
- 人工腎臓部
- 病理診断部
- 疾患栄養治療部
- 集中治療部
- 内視鏡部
- 臓器移植医療部
- デイ·サージャリー診療部
- 遺伝子診療部
- 感染制御部
- 外来化学療法部
- 心臓血管疾患集中治療部
- 女性のこころとからだの相談室
- 新生児集中治療部
- 高度治療部

薬剤部

看護部

事務部

- 総務課
- 経営管理課
- 経理·調達課
- 医療サービス課
- 医務課
- 新病院整備推進室

RSITY HOSPITAL

各診療科のご案内

内科	血液·腫瘍内科／内分泌·代謝内科	09
	循環器内科／消化器内科	10
	呼吸器内科／呼吸管理睡眠制御学	11
	免疫·膠原病内科／老年内科	12
	糖尿病·栄養内科／初期診療·救急科	13
	神経内科／腎臓内科	14
外科	消化管外科／乳腺外科	15
	肝胆膵·移植外科／小児外科	16
眼科／産科婦人科		17
小児科／皮膚科		18
泌尿器科／耳鼻咽喉科		19
整形外科／精神科神経科		20
歯科口腔外科／放射線治療科		21
放射線診断科／麻酔科		22
脳神経外科／形成外科		23
心臓血管外科／呼吸器外科		24

内科 Internal Medicine

血液・腫瘍内科 Hematology and Oncology

難治性血液疾患に対する最高水準の医療

白血病や悪性リンパ腫といった悪性腫瘍を中心に、再生不良性貧血や骨髄異形成症候群などの造血不全、HIV感染症などの診療を行っています。特に、白血病や悪性リンパ腫の治療に関しては、抗がん剤や放射線治療、移植療法を組み合わせ、新規の治療も積極的に取り入れています。

診療体制

外来は毎日、豊富な知識と経験を有する医師が血液内科領域全般を診察しています。入院では指導医と研修医が共同で主治医を務め、主に化学療法や造血幹細胞移植を行っています。個室19室を含む全43床に清潔な空気が供給されています。

対象疾患

急性骨髄性白血病、急性リンパ性白血病、ホジキンリンパ腫、非ホジキンリンパ腫、成人T細胞白血病、多発性骨髄腫、慢性骨髄性白血病、骨髄増殖性疾患、骨髄異形成症候群、再生不良性貧血、自己免疫性溶血性貧血、巨赤芽球性貧血、特発性血小板減少性紫斑病、キャッスルマン病、HIV感染症 他

診療、研究実績

一般的な診療についての実績

白血病や悪性リンパ腫などの造血器悪性疾患の治療を中心に行っており、これまで多数の診療経験があります。同種造血幹細胞移植は年間30例以上実施、国内でもトップクラスの症例数を誇っています。血縁者間移植のみならず非血縁者間や臍帯血移植、ミニ移植にも対応しています。

高度医療の取り組み・研究

○難治性悪性黒色腫への細胞免疫療法
造血器腫瘍にとどまらない悪性腫瘍全般に対する新たな治療として、悪性黒色腫の患者さんに樹状細胞を投与し、がんを攻撃する免疫反応を活性化させる新しい細胞免疫療法の臨床試験を皮膚科と共同で行っています。

内分泌・代謝内科 Endocrinology and Metabolism

生活習慣病と内分泌代謝疾患に対する最先端医療

内分泌代謝疾患、生活習慣病（メタボリックシンドローム、肥満症、糖尿病、高血圧、脂質異常症）と心臓、腎臓、血管合併症まで全身的診療を目標に研究室での新しい発見の治療への応用と、エビデンスに基づいた最先端医療を提供する指導的施設です。

診療体制

医療スタッフ約30名と、研究スタッフ約30名が連携。内分泌代謝、糖尿病、腎臓、循環器外来の専門外来を毎日7診担当しており、最先端の検査、治療を行うと共に、生活習慣改善のための糖尿病教室、運動療法教室など地道な診療活動にも力を入れています。

対象疾患

生活習慣病（メタボリックシンドローム、肥満症、糖尿病、高血圧、脂質異常症、痛風）およびそれらに合併する慢性腎臓病、虚血性心疾患、閉塞性動脈硬化症など。内分泌代謝疾患（下垂体、甲状腺、副腎、骨粗鬆症と骨軟骨カルシウム疾患など）。

デュアルインピーダンス法による内臓脂肪測定

診療、研究実績

一般的な診療についての実績

外来患者数延べ約32,000人。入院患者数約15,000人。昨年度検査は甲状腺エコー 640件、血管エコー 116件、心エコー 412件、腎エコー 40件、心筋シンチグラフィー 114件、甲状腺シンチグラフィー 59件、心臓カテーテル検査37件、腎生検29件、甲状腺針細胞診167件、骨密度測定（DXA法） 495件です。

高度医療の取り組み・研究

①難病創薬スーパー特区「難治性疾患を標的とした細胞間シグナル伝達制御による創薬」-新規ホルモン（レプチン、グレリン、CNP、アドレノメデュリンなど）のトランスレーショナルリサーチ（臨床応用）
心臓ホルモンANPとBNPの診断法と治療薬への臨床応用への実用化を達成し、その成功実績を踏まえて、脂肪萎縮性糖尿病（レプチン）、摂食異常症（グレリン）、軟骨無形成症（CNP）など稀少難病の最先端医療の研究成果をCommon Diseaseである生活習慣病とその合併症に展開する。

②革新的生活習慣病診療
生活習慣病（メタボリックシンドローム、肥満症、糖尿病、高血圧、脂質異常症、痛風、骨軟骨疾患）の予防、診断、治療。最新の成果はデュアルインピーダンス法による内臓脂肪測定機器をオムロンヘルスケアと共同開発し2011年春より臨床応用を実現。

③生活習慣病に対する内分泌細胞、血管細胞の再生医療
ヒトiPS細胞、ES細胞を利用した内分泌細胞（膵β細胞、脂肪細胞、ステロイド産生細胞、骨軟骨細胞など）と血管構成細胞の再生医療。

慢性腎臓病の腎生検

循環器内科 Cardiovascular Medicine

心臓と血管の病気：最先端医療から生活指導まで

心臓と血管の病気を抱えた患者さんにあい対するに際し、最先端の技術を含め、ひとりひとりの患者さんに最善と思われる医療を提供することを目標としています。さらに、最新の研究を通じて新たな治療法を開発し、世界に向けての情報発信を行っています。

診療体制

月曜日から金曜日まで5名前後の医師が外来で診療しています。一般病床46床とCCU(心臓血管疾患集中治療部)6床の入院病床を有し、約10名の日本循環器学会認定循環器専門医を含む循環器病の各領域のスペシャリストが診療に当たっています。

対象疾患

狭心症・心筋梗塞・閉塞性動脈硬化症・大動脈疾患・不整脈・心不全・肺動脈疾患・高血圧症などの心臓と血管の疾患全般を対象とします。救急患者さんについては、24時間体制で対応いたします。

診療、研究実績

一般的な診療についての実績

平成22年の入院延患者数は17,112人、平均在院日数は10.9日。

高度医療の取り組み・研究

①冠動脈疾患に対する薬剤溶出性ステント治療
狭心症や急性心筋梗塞などに対し、冠動脈カテーテル治療を積極的に行っています。平成22年の冠動脈カテーテル治療数は351例です。

②末梢血管疾患に対するカテーテル治療
動脈硬化により下肢の動脈などに狭窄がある方に対し、カテーテルによる治療を行っています。平成22年の治療数は94例です。

③重症心不全に対する両心室ペーシングと植え込み型除細動器
重症心不全に対する両心室ペーシングによる治療を行っています。平成22年の治療数は54例です。また致死性不整脈による突然死を予防するため植え込み型除細動器の手術を行っています。

④カテーテルアブレーション(心筋焼灼術)による不整脈治療
心房細動などの不整脈に対しカテーテルアブレーション(心筋焼灼術)による不整脈治療を行っています。平成22年の治療数は265例です。

⑤大動脈瘤に対するステントグラフト治療
胸部や腹部の大動脈瘤に対しステントグラフトを用いた低侵襲治療を行っています。平成22年の治療数は64例です

消化器内科 Gastroenterology and Hepatology

肝胆膵も胃も腸も、腹部のトータルケア

肝臓、胆道、膵臓、食道から胃～小腸～大腸と、腹部の幅広い領域の病気を診る極めて臨床的な科です。また、日本人の死亡原因第一位である癌の多くは消化器癌であることから、胃、大腸、肝癌、膵癌などの診断と治療に精力的に取り組んでいます。

診療体制

京都大学病院における消化管・肝胆膵疾患の内科診療のすべてを担当しており、外来患者は年間約3万人にのぼります。また、外来検査として腹部超音波検査に加え、内視鏡部と協力して消化管内視鏡検査も担当業務の大きな柱としています。

対象疾患

消化器系の癌（胃癌、大腸癌、肝癌、膵癌、胆道癌など）、炎症性腸疾患（潰瘍性大腸炎、クローン病など）、慢性肝炎・肝硬変、急性・慢性膵炎、胆道結石、胃・十二指腸潰瘍、逆流性食道炎、大腸ポリープなど。

診療、研究実績

一般的な診療についての実績

C型肝炎に対するインターフェロン治療、B型肝炎に対する抗ウィルス治療、肝癌へのラジオ波焼灼術、炎症性腸疾患への緩解導入・維持療法、早期食道癌や早期胃癌に対する内視鏡的切除術、膵胆道系疾患に対する内視鏡治療などに積極的に取り組んでいます。

高度医療の取り組み・研究

①炎症性腸疾患に対する集約的治療
潰瘍性大腸炎、クローン病をはじめとする炎症性腸疾患に対して、免疫抑制剤治療や腸内細菌製剤を用いた新しい集約的治療の取り組みを進めています。

②新しい内視鏡治療法の開発
早期食道癌および早期胃癌などに対する内視鏡治療に積極的に取り組んでおり、粘膜下層の剥離には新しく開発した剥離ナイフを用いて良好な成績をあげています。

③C型慢性肝炎に対する至適治療法の探索
C型慢性肝炎に対するペグインターフェロン+リバビリン併用療法における、薬剤の至適投与方法の決定のための臨床試験を進めています。

呼吸器内科　Respiratory Medicine

患者さんにやさしい呼吸器診療

気道、肺、胸壁など呼吸に関する臓器の障害からくる呼吸器疾患はきわめて多様ですが、当科では、各疾患に対する臨床･研究グループを設けてスペシャリストを育て、常に最新･最良の医療を行うよう努めています。

診療体制

内科学会、呼吸器内科学会指導医、専門医が呼吸器領域の疾患全般の外来･入院診療を担当。他科の疾患に関連した呼吸器合併症に対する診療も多く、院内の幅広い科と連携した診療体制をとっています。

対象疾患

肺癌、COPD、気管支喘息、気管支炎、肺炎、肺結核、肺非結核性抗酸菌症、気管支拡張症、間質性肺炎、サルコイドーシス、胸膜炎、気胸、膿胸、中皮腫、縦隔腫瘍、塵肺。
呼吸不全(急性、慢性)、睡眠時無呼吸症候群(呼吸管理睡眠制御学講座)

診療、研究実績

一般的な診療についての実績

病床数68床（うち結核病床15）の入院診療とともに、地域の病院･診療所との病･病連携、病･診連携を図りながら、COPD、慢性咳嗽、睡眠時無呼吸、間質性肺疾患、肺腫瘍などといった疾患別専門外来を開いています。

高度医療の取り組み･研究

①肺癌に対する個別化治療
肺癌組織の遺伝子解析による個々の患者に適した治療方法の確立を目指しています。

②CT画像解析による呼吸器疾患の病態解明
COPD、気管支喘息、サルコイドーシスなど呼吸器疾患のCT画像と症状や肺機能などとの関係から疾患の病態解明や治療への応用を開発しています。

③iPS細胞研究
COPD、間質性肺疾患、気管支喘息などを対象に、iPS細胞を用いた病態研究を進めています。

④肺移植
肺移植の適応評価、術前･術後管理などを行っています。

呼吸管理睡眠制御学　Department of Respiratory Care and Sleep Control Medicine

睡眠障害と呼吸管理の専門診療を実践

睡眠時無呼吸などの睡眠呼吸障害を中心とした睡眠障害や、いろいろな疾患が原因としておこる呼吸不全に対して、特定の臓器にとらわれない全身的な見地から適切な診察を行い、非侵襲的な呼吸管理法や酸素療法などを用いて最良の治療を専門的に実践することを目的に設立されたユニークな診療科です。

診療体制

内科学会、睡眠学会、呼吸器学会、神経内科学会の専門医を含む４名のスタッフを中心に、呼吸管理睡眠時無呼吸および神経睡眠外来と入院診療を担当し、他科疾患に合併することも多いため関連各科と連携をとりながら診療を行っています。睡眠障害の検査に必須の終夜ポリソムノグラフ検査では、日米の睡眠学会の認定資格をもつ４名の検査技師を中心に実施されています。
京都府内唯一の日本睡眠学会睡眠医療認定医療機関Aです。

対象疾患

呼吸不全（低酸素血症、高二酸化炭素血症を来す疾患）および呼吸困難を来す疾患、睡眠時無呼吸症候群を中心とした睡眠呼吸障害、その他の睡眠障害(ナルコレプシー、特発性過眠症、レム睡眠行動障害、むずむず脚症候群、周期性四肢運動障害など)。

診療、研究実績

一般的な診療についての実績

４床で、年間540件の終夜ポリソムノグラフ検査を実施し、外来患者は月約800名（持続陽圧：シーパップ600名、マスク人工呼吸50名を含む）および年間約300名の院内急性期マスク人工呼吸療法を他の診療科、地域の病院とも連携して、専門的な検査、診療を実践し、また、還元しています。

高度医療の取り組み･研究

①種々の非侵襲的な換気補助による呼吸管理
睡眠時無呼吸症候群などの睡眠呼吸障害、急性･慢性の呼吸不全の患者さんに、酸素療法を含めて、多種類のマスクを介して各種病態にあわせた非侵襲的換気療法(マスク人工呼吸管理：CPAP、bilevel-PAP、ASVなど)による呼吸管理を行います。

②移植医療を含めた高度先端医療を補助する呼吸管理
京大病院で実施されている肝、肺移植などの臓器移植、骨髄移植、先端技術を要する諸手術、生物製剤、化学療法などの高度医療に対して、術前術後、治療前後の呼吸管理を、非侵襲的人工呼吸器などを用いながら実践し、補助しています。

③呼吸不全に対する先進医療への取り組み
多くの基礎研究、臨床研究を通して、呼吸不全に関する病態解明を目指し、新規治療法の開発に向け、日夜努力を重ねています。

免疫・膠原病内科　Rheumatology and Clinical Immunology

リウマチ疾患・膠原病の専門診療を実践!

全国でも有数の膠原病専門の内科診療科として膠原病・リウマチ性疾患の診療および患者教育を行っています。膠原病は多臓器を障害する全身疾患であり、他科と積極的に連携を取って総合的な診療を行っています。新設のリウマチセンターとは特に緊密な連携をとっています。

診療体制

日本リウマチ学会認定指導医4人・専門医6人を中心に診療。研修医、指導医、教員による3人主治医体制で入院診療を行っています。病棟カンファレンス・回診を週2回開催、教授を含めた教員・指導医・研修医で入院患者さんの治療方針を決定します。

対象疾患

関節リウマチ、全身性エリテマトーデス、混合性結合組織病、強皮症、皮膚筋炎／多発性筋炎、結節性多発動脈炎を含む血管炎症候群、シェーグレン症候群、抗リン脂質抗体症候群、成人スティル病、ベーチェット病、IgG4関連疾患など

診療、研究実績

一般的な診療についての実績

外来患者月1,900名（新患患者80名）、入院患者年300名。病床数30床。他病院にて治療方針に苦慮する膠原病や、診断のつかない不明熱患者を可能な限り受け入れています。

高度医療の取り組み・研究

①RNA免疫沈降法を用いた自己抗体測定による治療方針の決定
われわれが開発した特異的かつ感度の高い自己抗体検出法（RNA免疫沈降法）を用いて、膠原病の診断、病型分類を行い、治療方針決定や予後の推定に役立てています。全国他施設からの依頼も受け付けます。

②膠原病の難治性病態における集学的治療
ステロイド療法抵抗性の、膠原病の難治性病態に対し、シクロホスファミドなどの免疫抑制薬、二重濾過血漿交換、生物学的製剤などを駆使し、有効な成績をあげています。

③臨床介入試験による膠原病先進治療の開発
多施設共同研究により、関節リウマチにおける各種生物学的製剤治療の改良や、膠原病性難治性病態の治療法開発を行っています。

老年内科　Geriatric Medicine

健やかな老後は、全身を診る老年内科から

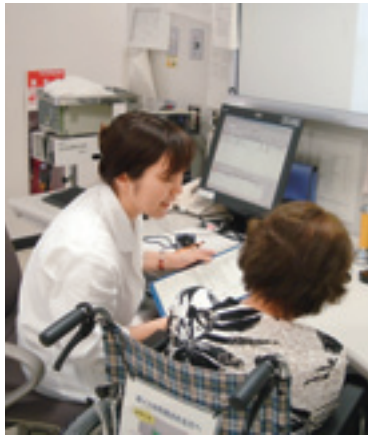
複数臓器の疾患のある高齢者の生活機能保持のためには全人的な診療が必要です。認知症の早期診断、寝たきりの原因となる骨折・脳梗塞予防に骨粗鬆症や動脈硬化の診断治療。壮年期からの生活習慣病、感染症の診断治療も行っています。

診療体制

老年病・内科専門医が全般的な高齢者医療を行なっています。入院患者への多職種専門家によるチーム医療を実践しています。高齢者加齢総合外来、 物忘れ外来、 アンチエイジング外来、 動脈硬化外来などがあります。

対象疾患

高血圧症、糖尿病、高脂血症、誤嚥性肺炎、老年症候群、アルツハイマー病その他の認知症、高齢者うつ病、骨粗鬆症、圧迫骨折、慢性閉塞性動脈硬化症、逆流性食道炎、めまい、低栄養症、歩行障害、意識消失発作、関節痛、腰痛、パーキンソン病など。



診療、研究実績

一般的な診療についての実績

①術中・術後の合併症を予防するための高齢者の術前機能評価、認知症のスクリーニングおよびCGAの実施依頼に対応。各種画像検査、血液検査を併用した骨粗鬆症や動脈硬化症、心理機能検査を併用した認知症の検査を行っています。

②高齢者の肺炎、腎盂腎炎など急性感染症、高齢者膠原病・不明熱、転倒、歩行障害、意識消失発作、めまいなどの診断・治療を行っています。

③理学療法部と連携した廃用症候の予防、嚥下訓練を行っています。

④入院・外来患者に対する包括的高齢者機能評価（CGA, Comprehensive Geriatric Assesment）を用いた認知機能、うつ、身体機能の評価を行っています。院内アンチエイジング教室も実施しています。

糖尿病・栄養内科　Diabetes and Clinical Nutrition

最新のエビデンスに基づく糖尿病治療の実践

患者さん各々の生活環境、社会的背景に配慮した、きめの細かい食事療法、運動療法、薬物療法を実施するために、患者さん中心のチーム医療（医師、管理栄養士、看護師、薬剤師、健康運動療法士）を実践しています。

診療体制

糖尿病学会認定指導医および専門医14人が中心となって一般外来を担当しています。「糖尿病・膵島外来」では、臓器移植医療部と連携し膵島移植レシピエントの候補者の移植に向けた的確な病態評価を実施しています。

対象疾患

糖尿病（1型、2型、遺伝子異常による糖尿病、膵性糖尿病、肝疾患に伴う糖尿病、内分泌疾患に伴う糖尿病、薬剤性糖尿病、および妊娠糖尿病）、栄養疾患（肥満症、消化吸収障害）、糖尿病に伴う慢性合併症など。

診療、研究実績

一般的な診療についての実績

的確な病態評価に基づいて臨床栄養学的アプローチ重視の治療を実施しています。外来患者は年間約27,000名、入院患者は年間約350名。糖尿病・栄養教室に年間約3,000名が参加、療養に必要な知識を効果的に修得しています。

高度医療の取り組み・研究

①膵島移植・膵臓移植
臓器移植医療部と連携し膵島移植、膵臓移植の推進にあたり、とくに周術期におけるさらに厳格な血糖値コントロールを目指して、連続式グルコース測定などの機器導入を積極的に進めています。

②臨床治験
2型糖尿病に対する臨床治験（サクサグリプチン、SK-0403など）を他施設と共同で実施中です。

③臨床研究
シタグリプチン長期投与による日本人2型糖尿病患者のインスリン分泌能の改善効果の検討（MAIKO　study）を他施設と共同で実施中です。

④厚生省主導の戦略的アウトカム研究
2型糖尿病患者対象に血管合併症抑制のための強化療法と従来療法のランダム化比較研究（J-DOIT3）を実施中です。

初期診療・救急科　Primary Care and Emergency Medicine

新しい救急医療のシステムを求めて

各診療科・診療部門の「扇の要」として、高度先進医療・専門医療が可能な大学病院の特長を生かした、質の高い救急医療の提供を目指しています。

診療体制

①救急部専従スタッフが11名在籍し、24時間365日体制で救急車搬送・急患対応が可能な体制を整えています。
②各診療科・診療部門との密接な協力体制のもと、極めて高度もしくは専門性の高い診療を緊急で行っていくことが可能となっています。

対象疾患

各診療科・診療部門との連携のもと、内因性・外因性を問わず、あらゆる病態に緊急で対応することが可能となっています。

診療、研究実績

一般的な診療についての実績

年間救急外来受診者数約9,000人～10,000人、救急車搬送台数2,500台以上、救急外来からの緊急入院患者数約1,900～2,000人。

高度医療の取り組み・研究

①災害医療への貢献
DMAT(厚生労働省管轄の災害医療派遣チーム)に正式参加し、地域での災害時医療の遂行に指導的役割を果たしています。

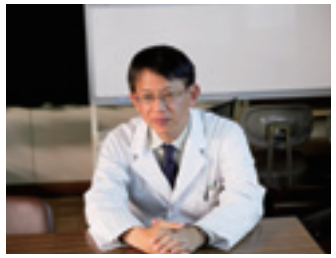
②高度救急医療プロジェクト
周産期合併症・脳血管障害・熱傷・CO中毒への高圧酸素療法・重症/新興感染症など、多くの高度救急医療プロジェクトを立ち上げています。

③外傷性軽度脳損傷後の認知機能障害の発生頻度およびその発生規定因子に対する研究
精神科神経科と共同で、外傷性軽度脳損傷により、どれくらいの頻度で、どのように認知機能の低下が生じるのかについての研究を行っています。

神経内科 Neurology

しびれから物忘れまで全神経疾患に対応

対象とする疾患は脳･脊髄･末梢神経･筋肉の疾患と広範囲に及び、超高齢社会を迎え患者数は急増しています。正確な臨床診断の下に適切な治療を行うことで、「治る神経内科」を目指し、診療に取り組んでいます。



診療体制

外来患者は年間約2万人。神経学会専門医をはじめとして、脳卒中専門医、てんかん専門医、認知症専門医などにより、高度の専門性を有する診療を展開しています。精密な診察をベースに、的確な検査、患者さん個々に応じたきめ細かな治療を提供しています。

対象疾患

パーキンソン病、てんかん、脳血管障害、アルツハイマー病などの認知症、筋萎縮性側索硬化症などの運動ニューロン疾患、脊髄小脳変性症、多発性硬化症、重症筋無力症、頭痛、脳炎、脊髄障害、内科疾患に伴う神経合併症など。

診療、研究実績

一般的な診療についての実績

入院件数は年間約500件。国内外の神経内科施設の中でも各種専門医が多く集結し、本邦のパーキンソン病やてんかん治療ガイドラインの委員を務めるなど、多種の神経疾患診療が可能となっています。また、病院内の他科、他部門、国内外の施設との連携･チーム医療を行っています。

高度医療の取り組み･研究

①ポジトロンエミッションCT
脳機能総合研究センターなどと共同で、脳血流ポジトロン断層検査による難治部分てんかん、認知症、パーキンソン病などの病態の把握に役立てています。

②硬膜下電極モニタリング
長時間ビデオ脳波モニタリングや、硬膜下電極留置によるモニタリングも行うことにより、正確な焦点の同定と周辺皮質機能局在の検索に努めています。

③遺伝子診断
遺伝子診療部とも連携し、倫理面に十分配慮しながら、各種遺伝性神経疾患の遺伝子診断を行っています。

腎臓内科 Nephrology

腎臓病のトータルケア

腎臓の病気は腎臓だけのこともあれば、高血圧や糖尿病、薬物による障害など二次的なものも少なくありません。尿検査から腎生検まで可能な限りの検査と豊富な知識で的確な診断を行い、それに基づいて最適な治療を行います。また末期腎不全に対し、もっとも的確な透析療法を導入しています。

診療体制

腎疾患、腎不全外来、腹膜透析外来、腎臓病教室を通じて、すべての腎疾患に対し、ご要望に沿った積極的治療を展開しています。腎炎や移植腎に対する腎生検組織診断をはじめ、末期腎不全に対するシャント作成術、透析の導入（血液透析、腹膜透析）、透析の合併症の治療を一貫して行っています。

対象疾患

急性腎障害、慢性腎臓病、末期腎不全、急性腎炎、慢性糸球体腎炎、ネフローゼ症候群、腎性高血圧、腎硬化症、糖尿病性腎症、ループス腎炎、ANCA関連腎症、薬剤性腎障害、遺伝性腎疾患（多発性のう胞腎、アルポート症候群など）、血液透析導入、腹膜透析導入、透析合併症（シャントトラブル、二次性副甲状腺亢進症、アミロイドーシスなど）

診療、研究実績

一般的な診療についての実績

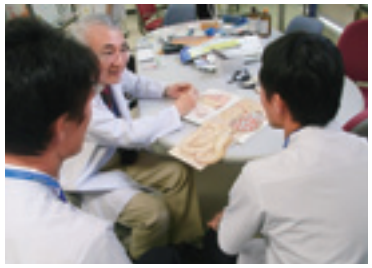
平成22年病理診断を行った腎生検45例（移植腎を含む）、新規血液透析導入46例、腹膜透析治療中患者20例、ブラッドアクセス手術78例

高度医療の取り組み･研究

①先進的血液浄化療法
腎疾患に対して通常の血液透析だけでなく、無酢酸透析、血液濾過透析、血液吸着、血漿交換、白血球除去など先進的なあらゆる種類の血液浄化療法を行っています。

②薬剤性腎障害
服用する薬の種類は年々増加し、それによる腎障害も増えています。薬剤性腎障害の発生の機序の解明の研究を薬剤部とともに行い、薬剤による腎障害の発生予防や治療法の確立を目指しています。

③IgA腎症に対する治療法の確立
慢性糸球体腎炎はもっとも多い腎炎ですが治療法は確立されていません。最少限のステロイドを使った治療法の臨床的研究を行っています。



外科 Surgery

消化管外科 Gastrointestinal Surgery

内視鏡による、身体に優しく精密な手術

消化管の良性疾患から悪性疾患まで幅広く診療しており、積極的に内視鏡による低侵襲手術を行っています。内科、放射線科とのチーム診療で、常に患者さんに最善の治療を提供できることを心がけています。

診療体制

診療科長を含む約10名の消化管外科医が、上部／下部消化管グループに分かれて診療を行っています。外来診療は月～金まで行っています。抗がん剤治療も主に外来にて施行しています。

対象疾患

食道癌、食道アカラシア、逆流性食道炎、食道憩室、胃癌、小腸腫瘍、虫垂粘液腫、結腸癌、直腸癌、潰瘍性大腸炎、クローン病、家族性大腸ポリポーシス、GIST、カルチノイド、直腸脱など。

診療、研究実績

一般的な診療についての実績

カメラや器具が入る1cmほどのキズを数カ所あけて行う内視鏡手術は、緻密な手術が可能の上、術後の回復も早く、美容的にも優れた方法です。年間の手術件数は、食道癌約35人、胃癌約100人、大腸癌約120人です。

高度医療の取り組み･研究

①内視鏡による低侵襲手術
食道から大腸まで内視鏡的治療を幅広く導入しており、がんの根治性と術後の機能温存の両立を目指しています。術後の患者さんの回復も早く、美容的にも優れています。より精密な手術を行うためのロボット(da Vinci システム)が導入されています。

②がんの集学的治療
食道がんから大腸がんに至るまで、内科や放射線科との討議の上、抗がん剤や放射線治療と手術を組み合わせて治療成績を上げる試みをしており、関連した多施設共同臨床試験も多く行っています。

乳腺外科 Breast Surgery

集学的治療と個別化治療の実践

手術療法、化学療法、ホルモン療法、抗HER2療法等の薬物療法、放射線療法の適切な組み合わせで、最小限の侵襲で最大限の治療効果を工夫。外来化学療法部、放射線科、病理診断部との検討会で、各症例の治療方針を決定しています。

診療体制

初診外来は月～金曜日まで毎日開設。乳癌の手術は通常短期入院プログラム、術後も、定期的に外来でフォロー。化学療法、ホルモン療法、放射線療法は外来が主体です。最高水準の乳癌診療を提供したいと考えています。

対象疾患

乳癌(原発性乳癌、乳癌術後、再発乳癌)、その他の乳腺腫瘍(葉状腫瘍、線維腺腫など)やしこり、異常乳頭分泌、腋窩リンパ節腫脹、乳房の痛み、乳癌の高リスクの方が対象です。

診療、研究実績

一般的な診療についての実績

年間約150人の初診の乳癌を治療。生検、画像診断から乳癌の広がりや性格を個別に診断し、術式(乳房切除術か乳房温存手術かなど)、薬物療法の適応とタイミングなどを決めます。乳房、腋窩は可能な限り温存する方針です。

高度医療の取り組み･研究

①分子診断を用いた再発リスクの個別評価
分子診断を用いた再発リスクの個別評価を行っています。本来予後良好な乳癌と必ずしもそうではない乳癌を峻別し、個人に合わせたより適切な治療方針をたてることを目的にしています。

②ホルモン受容体陰性、HER2陰性の乳癌の解析
有効な治療法が少ないホルモン受容体陰性、HER2陰性,"Triple negative"の乳癌に対する新しい治療法の開発を行っています。

③脂肪前駆細胞の分離、培養
手術によって採取した部分から、脂肪前駆細胞を分離、培養し、脂肪細胞を多く誕生増殖させ、乳房の欠損部の補填を目指しています。

④血液中の乳癌関連細胞の検出
血液中の乳癌関連細胞を測定し、治療による乳癌細胞数、血管内皮細胞数の変動を調べ、治療の有効性の確認、個々の患者さんごとの治療内容の最適化を行っています。

⑤分子標的治療における新しい効果予測因子の検討
抗HER2療法を主な対象として、新しい効果予測因子の開発を行っています。

肝胆膵・移植外科 Hepato-Biliary-Pancreatic and Transplant Surgery

質・量ともに日本をリードする肝胆膵・移植外科

肝臓・胆道・膵臓領域の良性・悪性疾患に対し、積極的に外科的治療や化学療法、IVRを行っています。移植医療としては、肝臓移植、小腸移植、膵島移植を行っています。患者さん本位のチーム医療を心がけています。

診療体制

上本伸二教授以下約30名の医師が診療に従事しています。当科では、全医師が肝胆膵・移植領域のgeneralistとなるべく、臓器別ではなく5つのグループに分かれて全領域の疾患を担当しています。また、消化器内科、放射線科、疾患栄養治療部等と定期的にカンファレンスを持ち、チーム医療を推進しています。

対象疾患

肝胆膵外科としては、肝癌（肝細胞癌、胆管細胞癌、転移性肝癌）、胆管癌、胆嚢癌、膵癌、膵管内乳頭腫瘍などの悪性腫瘍や、胆石症、肝内結石症などの良性腫瘍。移植外科としては、肝硬変、肝細胞癌、原発性胆汁性肝硬変、胆道閉鎖症、代謝性疾患、劇症肝炎、短腸症候群、Ⅰ型糖尿病など。

診療、研究実績

一般的な診療についての実績

年間の肝切除術約120例、膵切除術約80例、生体・脳死肝移植約70例、胆石症約50例など。生体脳死肝移植症例数、高難度肝胆膵外科手術症例数は、日本で最多です。

高度医療の取り組み・研究

①進行肝癌・膵癌に対する集学的治療
高度脈管侵襲を伴う肝癌や動脈・神経周囲浸潤を伴う膵癌に対し、積極的に術前化学療法や門脈枝塞栓術を施行し、また術後も肝動脈注入化学療法や補助療法を施行し、治療成績の向上に取り組んでいます。

②血液型不適合生体肝移植成績向上への取り組み
術前抗CD20抗体（リツキシマブ）投与や血漿交換、術後経門脈ステロイド投与などにより、血液型不適合症例に対する肝移植治療成績向上に取り組んでいます。

③Ⅰ型糖尿病に対する膵島移植
頻回に重篤な低血糖発作を起こすⅠ型糖尿病症例に対し、膵島移植による治療を行っています。また脳死膵臓移植に向けて準備中です。

小児外科 Pediatric Surgery

ヘルニアから肝移植・小腸移植まで幅広い小児外科診療

小児の消化管の病気、肝臓や胆道の病気、ヘルニア、呼吸に関係する病気、泌尿器の病気、悪性腫瘍を扱っています。肝移植を多く行い、小腸移植も行い、高度医療を安全にやさしく行っています。

診療体制

外来は現在、木曜日を中心に行っていますが、緊急の際には曜日を問わずに対応します。入院は北3階の小児病棟において診療を行っています。新生児はNICU（新生児集中治療部）で小児科と共に術前術後の管理を行っています。

対象疾患

消化管の病気（食道・十二指腸・小腸閉鎖症、直腸肛門奇形、腸回転異常症、短腸症候群、腸閉塞など）や肝臓・胆道の病気（胆道閉鎖症、肝硬変など）、ヘルニア（ソケイヘルニアなど）、呼吸器の病気（先天性横隔膜ヘルニア、肺分画症など）、泌尿器の病気（水腎症、膀胱尿管逆流症など）など。

診療、研究実績

一般的な診療についての実績

ヘルニア手術36例、生体肝移植16例、脳死小腸移植2例、食道閉鎖症2例、胆道閉鎖症手術2例、鎖肛手術3例、腫瘍手術10例、新生児手術12例などが主なものです。

高度医療の取り組み・研究

①肝移植
生体肝移植と脳死肝移植を行っている。
最近の生存率は95%を超えている。

②小腸移植
短腸症候群や機能的腸疾患に起因する小腸不全患者に対して脳死小腸移植を行っている。

③先天性高インスリン血症に対する外科治療
先天性高インスリン血症における膵島過形成の部位診断を正確に行い、病変部を切除する。

眼科 Ophthalmology

最先端の診療で最良の視機能を

眼科領域の全体をカバーしつつ、特に網膜硝子体疾患等の専門外来を設け、経験豊富な医師が診療を行います。従来の外科的治療に加えて、近年進歩の著しい内科的治療の両面から、個々の病状に最適な治療を行っています。

診療体制

眼科スタッフ13人を中心に10診体制で外来診察。初診の後は専門外来にて各疾患専門の医師による診断、治療を他科と連携しながら行います。また、必要に応じて、入院の上、手術加療や光線力学療法などを施行しています。

対象疾患

加齢黄斑変性･近視性脈絡膜新生血管･黄斑上膜･黄斑円孔など黄斑疾患、緑内障、糖尿病網膜症、網膜色素変性症、ぶどう膜炎、網膜循環疾患、神経眼科疾患、眼窩腫瘍、未熟児網膜症、斜視弱視、網膜剥離、白内障など。

診療、研究実績

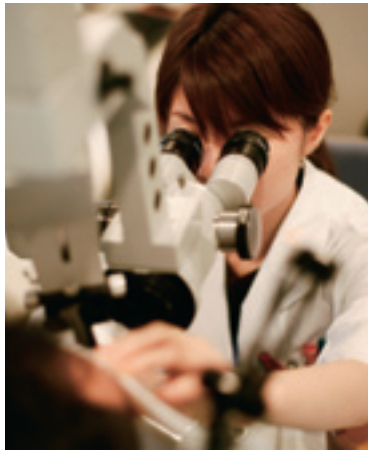
一般的な診療についての実績

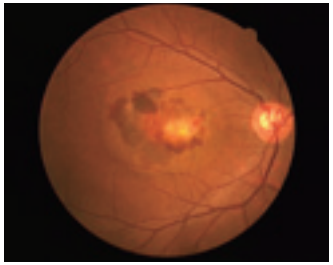
年間約1,400件の手術、特に難症例の多い硝子体手術約400件、緑内障手術約150件を行っております。また、抗VEGF療法などの硝子体注射を約1,000件、光線力学療法約200件と外科的、内科的両面からの治療を行っています。

高度医療の取り組み･研究

①bevacizumab硝子体内注射
脈絡膜新生血管･網膜循環疾患･糖尿病網膜症に対して、bevacizumab硝子体内注射を倫理委員会の承認を得て施行し、高い治療効果を得ています。

②光線力学療法
加齢黄斑変性症に対して750件以上行っていますが、効果が期待しにくい患者さんにはトリアムシノロンとの併用療法も行っています。





産科婦人科 Obstetrics and Gynecology

すべての女性に洗練された医療を

婦人科悪性腫瘍に対して、正確な診断と高度な技術により、個々の症例に合わせた最適の癌治療を実施。また高度な専門性を要するハイリスク妊娠を数多く扱う一方、症例に応じた段階的な不妊治療を行い良好な成績を得ています。

診療体制

常勤医師14名、医員･修練医15名で、24時間体制の診療を行っています。病理診断部、放射線診断科、放射線治療科、小児科などと緊密に連携して、診断、治療、新生児管理に万全を期しています。

対象疾患

子宮頚癌･体癌、卵巣癌などの悪性腫瘍、子宮筋腫、子宮内膜症などの良性腫瘍、子宮脱、月経異常、更年期障害など（婦人科）。正常妊娠、内科疾患合併妊娠、常位胎盤早期剥離などの産科救急疾患、胎児疾患など（産科）。不妊症、不育症（生殖医療部門）。

診療、研究実績

一般的な診療についての実績

年間100例の悪性腫瘍手術療法、癌化学療法、放射線治療などの集学的治療を行っています。年間350例の分娩、半数以上はハイリスク妊娠･分娩です。難治性不妊症を対象に約100例の体外受精胚移植法を行っています。

高度医療の取り組み･研究

①婦人科癌治療における癌免疫療法に関する研究
再発癌など、抵抗性の難治性癌に対する治療法として、免疫細胞を用いた新しい治療法の開発を目指して研究しています。

②胎児環境の生活習慣病発症への影響の検討
胎内で発育不全、低栄養出生児の生活習慣病（成長後）に対する発症機序や予防対策について研究しています。

③顕微授精や胚盤胞移植を用いた高度補助生殖医療
凍結融解胚移植、顕微授精、胚盤胞移植などにより、男性因子や難治性不妊症を対象に妊娠率24.2%と良好な成績を得ています。

小児科 Pediatrics

子供達とともに未来を志向する小児医療

少子化の進む社会に於いて、子供たちの健やかな成長がより一層望まれています。当科では、主に専門的医療を要する小児疾患を対象とし、高度な知識・技術を駆使しつつ、成長発達に考慮した診療を通して、小児医療全体に貢献します。

診療体制

入院では、血液・腫瘍、心臓・循環器、神経、免疫・アレルギー、内分泌・代謝、新生児の各部門の専門医が診療に当たります。長期入院に備え、院内学級・病棟保育・ボランティア活動も充実しています。外来では、上記の専門部門の診療に加え、心理・発達、遺伝療育の診療も行っています。

対象疾患

白血病・悪性リンパ腫・骨軟部腫瘍・脳腫瘍等の小児がん、先天性心疾患・川崎病等の小児循環器疾患、てんかん・発達障害等の神経疾患、先天性代謝異常症、低身長・糖尿病等の内分泌疾患、先天性免疫不全症・自己免疫性疾患・気管支喘息・アトピー性皮膚炎などの免疫アレルギー疾患、未熟児新生児疾患など。

診療、研究実績

一般的な診療についての実績

白血病・小児がんに対する化学療法、心臓カテーテル検査及び治療、各種神経疾患に対する薬物治療、低身長など分泌疾患に対するホルモン療法、先天性免疫不全症に対する抗体補充療法、自己免疫疾患・アレルギー疾患の加療、未熟児新生児医療など幅広い小児疾患に対応しています。

高度医療の取り組み・研究

①移植医療
難治性血液・悪性疾患、代謝異常症、先天性免疫不全症に対する造血幹細胞移植の実施、並びに肝芽腫・代謝異常症に対する肝臓移植の周術期管理を行っています。

②遺伝子診断
先天性免疫不全症や代謝異常症の遺伝子診断を行うと共に、様々な病気の原因や発症機構について研究し、新しい診断・治療法の確立を目指しています。

③再生医療
再生医療の臨床応用を目指し、ES・iPS細胞を用いた基礎的研究に取り組んでいます。

皮膚科 Dermatology

とっておきの皮膚科診療をめざして

炎症、腫瘍、自己免疫性疾患を含め、あらゆる皮膚疾患を対象として診療を行い、多数の専門外来で高度な医療を提供します。日帰り手術、悪性腫瘍に対するセンチネルリンパ節生検など、低侵襲医療にも積極的に取り組んでいます。

診療体制

外来は初診1名、再診3～5名が交代で担当。再診は各種専門外来で、初診での診断・治療後に専門外来担当医師が治療を引継ぎます。常に約20人が入院、指導医と専門修練医が共同で治療を担当するなど、最適な医療を実施します。

対象疾患

皮膚悪性/良性腫瘍、皮膚リンパ腫、アトピー性皮膚炎、蕁麻疹、皮膚そう痒症、乾癬、角化症、接触皮膚炎、光線過敏症、白斑、脱毛症、皮膚潰瘍、褥瘡、静脈瘤、自己免疫性水疱症、膠原病、皮膚細菌/真菌感染症、ウイルス感染症など。

診療、研究実績

一般的な診療についての実績

関連病院や地域の皮膚科医と連携、アトピー性皮膚炎の教育入院、悪性腫瘍の手術、化学療法まで幅広く対応。毎週行われる外来回診では全医師が集まって困難な症例を検討するなど、スタッフ全員によるチームでの診療を行っています。

高度医療の取り組み・研究

①皮膚悪性腫瘍の治療
ダーモスコピー、センチネルリンパ節生検、ケミカルピーリングを導入し、有効かつ低侵襲的治療法を選択して行っています。

②難治性円形脱毛症
一般的な治療に加えて、パルス療法、局所免疫療法、紫外線療法などを組み合わせ、病状にあわせた治療で効果を挙げています。

③より良い皮膚科医療を目指し、皮膚アレルギー、創傷治癒、角化症、脱毛症、腫瘍免疫、接触皮膚炎、痒み、光線過敏症に関する基礎的、臨床的研究を行っています。

泌尿器科 Urology

日本トップレベルの標準・高度医療を安全性高く推進

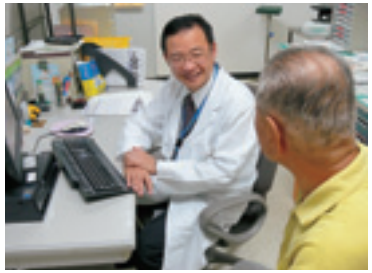
標準的医療を安全にかつ最先端の医療にも積極的に取り組みます。体腔鏡下泌尿器科手術を国内でいち早く取り入れ、尿禁制型代用膀胱作成手術や尿路性器腫瘍に対する新規抗癌剤治療など、高度医療を先導してきました。

診療体制

年間約23,000人の外来患者に対し、教授以下10名の専門医が診療を担当。特に泌尿器科腫瘍、排尿障害・尿失禁、男性不妊などの専門診療を。前立腺癌についてはがん診療部との提携で質の高い医療を提供しています。

対象疾患

腎臓癌、腎盂癌、尿管癌、膀胱癌、前立腺癌、精巣腫瘍、副腎腫瘍、前立腺肥大症、排尿障害・尿失禁、尿路性器感染症、尿路結石症、男性不妊症、腎移植、膀胱尿管逆流症、停留精巣、尿道下裂などの小児泌尿器科疾患など。



診療、研究実績

一般的な診療についての実績

年間約500例の手術、うち約100例をデイ・サージャリーで対応。悪性腫瘍の手術を得意としており、機能温存と低侵襲に配慮。前立腺肥大症に対してはレーザー内視鏡をいち早く導入、大きな肥大症にも経尿道的手術が可能となっています。

高度医療の取り組み・研究

①体腔鏡手術（腹腔鏡手術）
副腎腫瘍、腎腫瘍、前立腺癌をはじめとして積極的に体腔鏡手術を施行。単孔式手術やロボット補助手術も導入し、更なる低侵襲性を追求しています。

②機能再建術
前立腺癌の術後合併症、男性機能障害防止のため、勃起神経温存手術を行うとともに、温存が困難な場合には神経移植術による神経再建を行っています。また膀胱全摘術後の人工膀胱作成にも安定した手技を誇っています。

③臨床試験
JCOG（日本臨床腫瘍研究グループ）に属し、浸潤性膀胱癌に対する術前化学療法の意義や早期前立腺癌術後の再発に対する放射線照射などに関する試験を実施中。男性腹圧性尿失禁に対する尿道スリング手術の臨床試験も実施しています。

耳鼻咽喉科 Otolaryngology

機能温存・再生を目指した頭頸部機能外科

耳、鼻、喉のほか、頭頸部領域は多くの機能（聴覚・平衡覚、発声、嚥下、呼吸など）を有する部位であり、機能温存や回復を常に目指した治療を行います。再生医療を駆使した臓器・機能再生の臨床応用も行っています。

診療体制

耳鼻咽喉科・頭頸部外科の専門医が外来・手術を行っています。耳・鼻・喉・頭頸部腫瘍の各専門家がそれぞれの専門外来で毎週診察を行い、手術適応の方には最新の医療を提供します。

対象疾患

耳疾患：慢性中耳炎、真珠腫性中耳炎、聴神経腫瘍、高度感音難聴。鼻疾患：慢性副鼻腔炎、副鼻腔嚢胞、鼻中隔湾曲症。喉頭疾患：声帯ポリープ、声帯麻痺、痙攣性発声障害。頭頸部腫瘍：口腔癌、咽・喉頭癌、副鼻腔癌、頭蓋底進行癌、甲状腺癌など。

診療、研究実績

一般的な診療についての実績

数多くの外来患者診察と年間約600件の手術を行っています。手術では耳・鼻・喉頭の機能的手術に加え、再建外科、頭蓋底外科を含む頭頸部癌の手術、人工内耳、聴神経腫瘍手術などの高度な手術実績を誇ります。

高度医療の取り組み・研究

①人工内耳
高度感音難聴（特に小児）に対し積極的に人工内耳手術を行っています。

②内耳再生
高度感音難聴に対する内耳再生の研究および臨床への応用に取り組んでいます。

③頭頸部組織再生
頭頸部癌治療後などの組織欠損に対し、組織再生の研究を行っており、これまで喉頭、気管、顔面神経の再生などが臨床応用されています。

整形外科　Orthopaedic Surgery

活動的な生き方を支える運動器のエキスパート

高齢化社会、健康志向の現在、運動器疾患治療の需要は高まるばかりです。低侵襲で最大の効果をあげる先進的な手術とリハビリテーションによりQOLを最大限高める治療に取り組んでいます。

診療体制

医師12人で一般外来を担当、脊椎、股関節、骨軟部腫瘍、リウマチ、スポーツ障害膝肩疾患、上肢疾患を各3～4名の専門医が担当、手術･外来診療を行っています。日帰り手術や比較的短期間の入院で運動器のほぼ全ての分野をカバーしています。

対象疾患

頸椎症、腰部脊柱管狭窄症、脊髄腫瘍、脊柱靭帯骨化症、変形性股関節症、大腿骨頭壊死、関節リウマチ、スポーツ障害、膝靭帯軟骨損傷、骨粗鬆症、腕神経叢損傷、キーンベック病、悪性骨腫瘍、悪性軟部腫瘍など。

診療、研究実績

一般的な診療についての実績

年間手術件数約700件。人工股関節手術約120件（うち再置換術約30件）、脊椎脊髄手術約80件、人工膝関節手術約80件、悪性骨･軟部腫瘍約30件などを行っています。

高度医療の取り組み･研究

①人工関節の開発
高い術後機能と耐久性をもった人工股関節･膝関節を開発し使用しています。また人工関節を開発中です。

②ナビゲーションシステム、三次元実体模型
脊椎手術、人工関節手術にナビゲーションシステムや三次元実体模型を導入し手術の正確性、安全性を高めています。

③腕神経叢損傷
難治性障害である腕神経叢損傷に対しての機能再建手術を積極的に行っています。

④骨軟骨移植
若年者の関節軟骨損傷に対して骨軟骨移植（モザイクプラスティー）を行っています。

⑤臨床試験
成人高悪性度軟部肉腫に対する化学療法、骨肉腫、ユーイング肉腫に対する集学的治療を多施設共同研究として実施中です。

精神科神経科　Neuropsychiatry

多彩な精神の病気に専門的治療

統合失調症や気分障害のみならず、多様な精神疾患に対する治療を専門的に行っています。病棟はマーク式閉鎖方式をとっており、入院の必要な急性期の精神症状を呈する方を積極的に受け入れる体制を整えています。

診療体制

外来患者数は延べ30,000人を超え、20,000人近い入院診療を行っています。児童青年期、摂食障害の専門外来も設けています。急性期治療に対応したマーク式閉鎖病棟で、人権に配慮したアメニティーを配備しています。

対象疾患

統合失調症、急性一過性精神病性障害、気分障害（うつ病･躁うつ病）、器質性精神障害、中毒性精神障害、不安障害、強迫性障害、摂食障害、てんかん、自閉性障害、チック障害、認知症など。

診療、研究実績

一般的な診療についての実績

統合失調症や気分障害を中心に、児童･青年期疾患、てんかんなど、幅広い領域において診療を行っています。精神療法的接近をはかりながら、薬物療法あるいは高度な専門治療を行い、さらにデイ･ケア診療部と連携して、複合的で一貫性のある治療を行っています。

高度医療の取り組み･研究

①難治性疾患への通電療法
パルス波治療器を導入し、遷延性うつ病、遅発性緊張病、急性精神病などいずれも薬物治療に抵抗性のある症例に対して修正型通電療法による通電療法を行っています。

②児童･青年期の専門外来
18歳以下の児童･青年を対象とした児童外来を設置し、自閉性障害やアスペルガー障害などの広汎性発達障害、注意欠陥･多動性障害、神経症性障害、チック障害、精神病性障害などに対する専門的な治療を行っています。

③精神科リハビリテーション
精神科作業療法では、主に外来患者を対象とし、幅広い疾患をカバーしています。デイケア診療部では、統合失調症や感情障害などの社会機能の回復を支援するとともに、患者家族への心理教育も並行して実施しています。

歯科口腔外科　Oral and Maxillofacial Surgery

口腔機能障害をおこす全ての疾患が治療領域

咀嚼･嚥下、構音等に関わる重度の口腔機能障害を伴う疾患（顎変形症、口腔腫瘍、歯槽堤萎縮症、顎関節症）や、睡眠時無呼吸症候群、舌痛症などに対して高度な医療を提供することを目標にしています。

診療体制

一般歯科口腔外科診療、各専門医による専門外来を開設しています。腫瘍、組織再生インプラント、顎関節関連疾患、顎矯正、睡眠時呼吸障害、口腔難治性疾患、唇顎口蓋裂補綴、顎顔面骨骨折、審美歯科の各外来を設けています。

対象疾患

智歯および埋伏歯、顎変形症、口腔腫瘍、歯槽堤萎縮症、顎関節症、顎嚢胞、睡眠時無呼吸症候群、舌痛症、顎顔面骨骨折、顎顔面組織欠損、重症口腔感染症、口腔乾燥症などや有病者の歯周病など。

診療、研究実績

一般的な診療についての実績

平成22年の新患患者数は2,962名、再来数は21,650名、患者紹介率は52.4%です。デイ･サージャリー（日帰り手術）での手術件数は971件でした。新入院患者数は385名、中央手術室での手術件数は198名でした。

高度医療の取り組み･研究

①インプラント義歯
専門外来で通常の義歯による咀嚼機能の回復が困難な高度の歯槽堤萎縮症に対して歯科インプラント治療を行っています。

②顎顔面補綴
専門外来で顎顔面の腫瘍切除後、外傷あるいは先天性の骨･軟組織欠損に対して、インプラントを応用したエピテーゼの作製を行い、審美的･機能的回復を行っています。

③口腔領域の歯牙･骨軟骨の再生医療
歯牙の歯髄や顎関節液中の特殊な細胞を採取･増殖させ、歯牙や顎骨や顎関節軟骨の再生を目的とした研究を行っています。

放射線治療科　Therapeutic Radiology

目に見えぬ、科学のメスでがんを斬る

「がん」を中心とした腫瘍性疾患の治療を行っています。放射線治療は機能･形態温存性に優れています。さらに、がんの特性に精通した医学、物理学、生物学の専門家が結集し、難治がんの治療、低侵襲性･先端的な治療法の開発と普及を行っています。各科とも連携し個々の病態に応じた質の高い「がん治療」を提供しています。

診療体制

教授以下、スタッフ10名、医員6名、医学物理士5名。毎日の総合外来で全般的な放射線治療に対応するほか、領域別の専門外来を開設。一般 17床、RI 5床の入院病床。特殊治療としては強度変調放射線治療、定位放射線治療、化学放射線療法、RI治療、小線源治療を実施。外来がん診療部臓器別ユニットにも参画し、集学的治療の確立を目指しています。

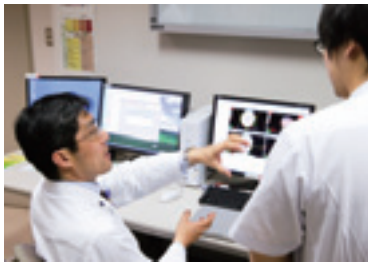
対象疾患

乳癌、肺癌、前立腺癌、中枢神経腫瘍、頭頸部癌、食道癌、膵癌、婦人科癌、悪性リンパ腫、甲状腺癌、小児腫瘍、悪性中皮腫、直腸癌、肝臓癌、皮膚癌、骨軟部腫瘍などの悪性腫瘍全般。

診療、研究実績

一般的な診療についての実績

約1,000人の新患を含む年間約1,200人の放射線治療を実施。乳癌に対する乳房温存療法は累積症例数3,000例以上を有します。常に先端医療を先導。強度変調放射線治療は前立腺癌、頭頸部癌を中心に全国最多の実績を有します。また、肺、食道、膵癌などの難治がん克服に向けて、薬剤との併用や新規照射法の臨床試験を行っています。



高度医療の取り組み･研究

①強度変調放射線治療（IMRT）
最新技術を応用した革新的放射線治療技術です。病変に対する放射線の集中度を著しく高め、治療効果の向上と合併症の軽減の両立が可能です。

②定位放射線治療（ラジオサージャリー）
誤差１mm以内という高い精度で病変部に集中的に放射線を照射します。早期肺癌に対し約90%と高い局所制御率を有します。

③動体追尾照射
新規画像誘導放射線治療装置MHI-TM2000の導入により、動く病変を追尾して狙い撃ちすることが可能となりました。まずは肺癌に対する臨床応用を目指しています。

放射線診断科　Diagnostic Radiology

体の中を映像化して病気を診断

画像機器･診断の発展は目覚しく、あらゆる医療分野において役立っています。画像診断から非侵襲治療まで幅広い診療内容を受け持ち、最先端の技術を用いて各診療科を総合的にサポートしています。

診療体制

検査による診断･治療の件数は年間CT:35,000件、MRI:13,000件、IVR:700件、RI:5,500件です。教授以下10名のスタッフが担当。画像診断、IVR、超音波やCTによる生検、放射線治療科との協力で同位元素内服療法など幅広い領域をカバーしています。

対象疾患

CT、MRI、PETを含むRI（核医学）検査、胃･大腸透視、超音波、血管造影、IVR（インターベンショナル　ラジオロジー）などにより、あらゆる疾患の検査･治療を行っています。

診療、研究実績

一般的な診療についての実績

各診療科の高度な医療を支えるため、各領域の専門家が集まりカンファレンスを行い、個別症例についての詳細な検討を行っています。緊急CTは随時試行しており、急性期脳梗塞や脊髄損傷などの緊急MRIにも迅速に対応しています。

高度医療の取り組み･研究

①マルチスライスCTによる画像診断
　64列装置を含む5台のマルチスライスCT装置による、高精細な3次元再構成画像を作成。脳腫瘍や腹部腫瘍の術前シミュレーション、循環器疾患の評価にも威力を発揮しています。

②MRIによる画像診断
　腫瘍浸潤、心筋や子宮機能などの動態評価など、進化した画像診断を行います。脳神経や腹部において3テスラのMRI機器による最先端研究。拡散強調画像などの最新の撮像法により病変の検出力の向上を目指します。

③PETによる画像診断
　PET画像をCTやMRIといった他の画像との融合画像をITソフトで作成、PET専門医により精度の高い診断を行います。

④画像を用いた低侵襲治療（IVR）
　X線透視、USなどの画像を用いてカテーテル治療、腫瘍焼灼術、ドレナージ術などを行います。

麻酔科　Anesthesia

手術中の安全と安心、痛み疾患の治療

さまざまな手術を安全に受けていただけるよう患者さんの体の状態に応じて最適な麻酔を提供します。また痛み疾患に対して、専門的に外来および入院治療に取り組んでいます。

診療体制

特殊な手術の麻酔管理は専門のスタッフが担当します。痛み疾患の治療は週3回ペインクリニックの専門スタッフが担当。重症患者の集中治療や日帰り手術の麻酔管理にも中心的なスタッフを派遣しています。

対象疾患

手術麻酔はすべての手術対象疾患が対象です。ペインクリニックは癌性疼痛、帯状疱疹後神経痛、頭痛、三叉神経痛、頸肩上肢痛、腰下肢痛、複合性局所疼痛症候群、末梢血行障害など。

診療、研究実績

一般的な診療についての実績

痛み疾患に対して特に各種神経ブロックを中心とした治療を行っています。

高度医療の取り組み･研究

①肝移植の麻酔
　重症肝疾患に対する生体部分肝移植、脳死肝移植の麻酔管理を行っています。

②体腔鏡下手術の麻酔
　胸部、腹部などの疾患に対し体に負担が少ない手術法の麻酔管理を行っています。

③覚醒下開頭手術の麻酔
　できるだけ脳機能を温存させるために意識のある状態で頭蓋内の手術ができるようにしています。

脳神経外科 Neurosurgery

脳機能の温存・再生へと最先端医療に挑む

巨大脳動脈瘤、脳動静脈奇形、悪性脳腫瘍、脳深部腫瘍、てんかん、もやもや病などの治療困難な疾患に対して、各疾患のエキスパートを中心に高度な医療技術と最先端の手術支援システムを駆使して治療にあたっています。

診療体制

スタッフは、教授、講師3名、助教6名、医員・専攻医12名。一般外来と専門外来があり、多数の治療困難な症例の紹介を受けております。脳神経外科カンファレンス（5回／週）に加えて他科と合同カンファレンスも行い治療方針を決定します。脳卒中診療部では高度な医療管理を必要とする急性期脳卒中の受け入れを24時間体制で行っております。

対象疾患

脳血管障害（くも膜下出血、脳動脈瘤、脳動静脈奇形、硬膜動静脈瘻、海綿状血管腫、脳血管狭窄症・閉塞症、内頸動脈狭窄症・閉塞症、もやもや病など）、脳脊髄腫瘍：悪性脳腫瘍、胚細胞腫、下垂体腺腫、頭蓋底腫瘍、小児脳腫瘍など）、機能的脳障害（てんかん・痙攣発作、顔面痙攣、三叉神経痛、パーキンソン病など）、小児奇形・水頭症など

診療、研究実績

一般的な診療についての実績

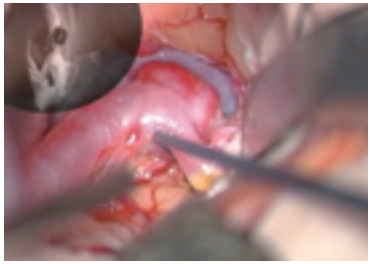
各疾患のエキスパート（脳神経外科専門医14名）を中心に診療にあたります。他科と連携により手術、放射線治療、化学療法で先進的な診療を行っています。年間入院患者数1,000名以上、年間手術件数550件以上と年々増加しています。

高度医療の取り組み・研究

①治療困難な巨大脳動脈瘤や脳動静脈奇形に対する治療
高度な頭蓋内外血管のバイパス術に加えて最先端のデバイスを用いた脳血管内手術を併用した治療を行っています。

②悪性脳腫瘍に対する脳機能温存手術と新規放射線治療・化学療法
腫瘍手術では、高磁場MRI装置を用いた脳機能イメージング、覚醒下手術、術中ナビゲーション装置を駆使した脳機能温存手術で摘出率が向上しています。ノバリス、IMRT（強度変調放射線治療）を用いた放射線治療に加えて新たな化学療法レジメを開発し、悪性グリオーマの治療を行っています。

③てんかん手術
脳磁図を用いた脳機能局在の術前評価、硬膜下電極埋め込みによるてんかん焦点の同定および脳機能局在の評価を行い、難治性てんかんの治療を行っています。



形成外科 Plastic Surgery

“かたち”と“機能”の両立をめざして

先天性、後天性を問わず、あらゆる変形・醜形・欠損・機能障害を外科的手段で修復。患者さんのQOLを向上させます。他科との連携手術も多く、スムーズなチーム医療の実践に日々努めています。

診療体制

スタッフは教授以下教員5名（准教授1名、講師1名、助教3名）、医員8名、言語聴覚士2名（リハビリテーション部所属）。一般外来は月曜から金曜まで毎日、外来担当医が専門外来も受け持っています。入院ベッド数は23床です。

対象疾患

口唇裂口蓋裂、耳介先天異常、皮膚悪性腫瘍、母斑、血管腫、多指症、合指症、皮膚潰瘍、ケロイド、瘢痕拘縮、褥瘡、顔面外傷（顔面骨骨折など）、眼瞼腫瘍、乳癌術後の乳房再建、頭頸部癌術後の再建、顔面神経麻痺の修復再建など。

診療、研究実績

一般的な診療についての実績

年間の手術件数は約1,100～1,200件。6割はデイサージャリーです。代表的なものは口唇口蓋裂などの先天異常の手術約200件、悪性腫瘍とそれに関連する再建手術が約100件、瘢痕・ケロイド・瘢痕拘縮の手術が約100件です。

高度医療の取り組み・研究

①顔面神経麻痺の形成外科的治療
陳旧性の顔面神経麻痺に対し、麻痺からの時期、症状の程度により静的再建、神経移植による再建、機能筋移植による再建手術を行っています。

②難治性皮膚潰瘍を対象とした新規医療基材と線維芽細胞増殖因子との併用による創傷治療の安全性及び有効性に関する探索的臨床試験
医用材料としてはわが国初の医師主導治験です。通常の治療では治癒が期待できない難治性皮膚潰瘍を対象に、当科で開発した治験機器（GM081：新規人工皮膚）と医療用医薬品であるトラフェルミン製剤（フィブラストスプレーR）との併用療法を行い、治験機器の安全性および有効性を確認することを目的とします。

③乳癌術後の乳房再建手術
乳癌術後の乳房再建には、筋肉を犠牲にしない穿通枝皮弁を用いた形成手術を中心に、オーソドックスな広背筋皮弁や腹直筋皮弁も選択肢に加えて治療を行っています。

心臓血管外科　Cardiovascular Surgery

新生児から高齢者まで安全な手術を提供

先天性、後天性心疾患の各分野にバランス良い症例数と、良好な手術成績をあげています。すでに確立された手術を確実に行うことを基本方針としつつ、最新の治療法も積極的に取り入れて手術の効果と安全性を高めるようにしています。

診療体制

心臓血管外科経験年数10年以上の常勤スタッフ6名が診療。手術執刀責任医は心臓血管外科専門医。小児の診療、手術は小児心臓外科専門施設で研修を受けたスタッフが担当しています。

対象疾患

虚血性心疾患(狭心症、心筋梗塞)、弁膜症(僧帽弁狭窄、僧帽弁閉鎖不全、大動脈弁狭窄、大動脈弁閉鎖不全)、先天性心疾患(心房中隔欠損、心室中隔欠損、ファロー四徴、大血管転位など)、心筋症、心不全、大動脈瘤、閉塞性動脈硬化症など

診療、研究実績

一般的な診療についての実績

心大血管手術件数は年間約250件。冠動脈バイパス手術では動脈グラフトを多用、弁膜症に対しては自己弁を温存した弁形成術を行うなど、術後の生活クオリティーを重視した手術を行っています。大動脈瘤に対しては、低侵襲なステントグラフト内挿術も積極的に行っています。

高度医療の取り組み･研究

○下肢虚血に対する増殖因子徐放を用いた血管新生療法
外科治療の対象とならない重症の下肢虚血（閉塞性動脈硬化症、バージャー病)に対する、塩基性線維芽細胞増殖因子(bFGF)の局所徐放による血管新生療法の臨床試験を実施中です。

呼吸器外科　Thoracic Surgery

自ら受けたい治療の創造

「自分が患者になったら」を常に考え、呼吸器内科、放射線科、外来化学療法部などとの連携を密に取り、診断、集学的治療、手術、再発時の治療を円滑に行い、終末期医療についてもホスピスなどとの連携で対応しています。

診療体制

肺疾患に関する豊富な知識を持った複数の呼吸器外科専門医が患者さんの治療を行います。外来は月曜日から金曜日まで、肺移植外来(月曜日)、肺癌･中皮腫外来(金曜日)など専門外来も行っています。

対象疾患

原発性肺癌、転移性肺腫瘍の他、膿胸、肺真菌症、肺結核･非定型抗酸菌症などの感染性疾患、自然気胸などの胸膜疾患、巨大肺嚢胞症などの気腫性疾患など。また重度呼吸不全に対する肺移植を行っています。

診療、研究実績

一般的な診療についての実績

年間400件以上のさまざまな呼吸器外科手術を行っていますが、このうち原発性肺癌が200例以上を占めています。心疾患、高血圧、糖尿病、肺気腫、間質性肺炎などの合併症をかかえた患者さん、80歳以上の高齢の患者さんの手術を多く行っています。

高度医療の取り組み･研究

①肺移植
呼吸不全患者に脳死肺移植、生体肺移植を行っています。5年生存率は、80%を超えており、世界の平均50%を大きく上回っています。

②低侵襲手術
手術は原則として、カメラを用いた手術を標準とし、患者さんの負担を減らすことを重視しています。また、肺の機能を温存するために切除範囲を小さくした縮小手術も行なっています。

③オーダーメイド医療への試み
遺伝子などの検査により抗癌剤を選択するなど、患者さん個人に合った治療を選択しています。

中央診療センター等のご案内

検査部／手術部	26
放射線部／リハビリテーション部	27
デイ･ケア診療部／医療器材部	28
輸血細胞治療部／分子細胞治療センター	29
周産母子診療部／人工腎臓部	30
病理診断部／疾患栄養治療部	31
集中治療部／内視鏡部	32
臓器移植医療部／デイ･サージャリー診療部	33
遺伝子診療部／感染制御部	34
外来化学療法部／心臓血管疾患集中治療部	35
女性のこころとからだの相談室／新生児集中治療部	36
高度治療部／医療情報部	37
看護部	38
薬剤部	39
探索医療センター	40
地域ネットワーク医療部／治験管理センター	41
医療安全管理室／総合臨床教育･研修センター	42
診療報酬業務センター／医療開発管理部	43
がんセンター	44
先端医療機器開発･臨床研究センター／リウマチセンター	45
病院運営企画室／事務部	46

検査部 Clinical Laboratory

高度医療を支え先進の臨床検査を実践する

高度医療を支えるため幅広い臨床検査を実践しています。24時間365日の緊急検査体制や外来患者の診察前当日検査の実現、さらに超音波検査センターの開設など、診療サービスの向上に取り組んでいます。

業務体制

検体検査を統合する自動化検査（システム）部門、心電図など生体検査を行う生理検査部門、院内統合された超音波検査センター、感染症の原因を明らかにする微生物検査部門、そして生体材料の遺伝子検査部門など、柔軟な検査態勢を構築。夜勤･日勤体制の確立、治験業務の組織的対応など種々の診療ニーズに機動的な対応を行っています。

検査の質のレベルアップと人材育成

新人技師は約1カ月間の研修を経てから検査室に配属。その後も部内勉強会の開催、各種認定資格取得等を通じて臨床検査の質のレベルアップに取り組むとともに、次代の臨床検査をリードする人材の育成をめざしています。

診療、研究実績

一般的な診療についての実績

検査部では年間670万件以上の検体検査、6万件以上の生理検査および13万件を超える外来患者採血を行っています（平成21年度実績）。それぞれ増加傾向にありますが、検査項目の拡充と精度の向上を両立しつつ対応しています。

高度医療を支える検査部として

①チーム医療へ積極的に取り組んでいます。

②入院患者の糖尿病教室における検査指導、NSTやICTへの参加、さらには病棟での採痰指導など、診療科･各部門と連携した様々な臨床検査サービスの提供は検査部の重要な役割になっています。

③中央診療センターとして各診療科における先進的医療を支える立場にあり、EBウイルスやサイトメガロウイルスの遺伝子検査は、当院で実施されている移植医療において欠かせないものとなっています。

④新たに開設される超音波検査センターでは、最先端の超音波検査の中核として機能します。

手術部 Operation Theater

高度な手術をより安全に提供する

入院されている患者さんに対する予定、緊急手術を安全にかつ効率よく行えるよう、最新の設備、器械を揃え、各診療科、関係部門と協力しながら手術室の運営を進めています。

診療体制

手術室16室を有し、年間6,000件の手術が行われています。H22年度には臓器移植法改訂により肝･肺移植が増加し、さらに脳死心臓移植実施･ロボット手術開始に向けてより専門性を高めています。また、手術室の環境を整え安全･感染対策に視点を置き、外科医･麻酔科医･看護師･臨床工学士･洗浄滅菌技能員･清掃員など多くの医療チームが一丸となって取り組んでいます。

運営方針

手術室では「患者さんに安全･安心して手術が受けられるよう」患者を中心とした医療チームを目指して体制を整えています。タイムアウトを実施するなど、安全管理への意識向上に努め、手術件数を増やす努力をしています。

診療実績

手術部内で行われる高度先進医療を含む各診療科の手術に貢献しています。麻酔記録の電子化による情報の共有化、手術部担当薬剤師の配置による薬剤管理の厳密化も進めています。

放射線部 Radiology and Nuclear Medicine Service

診療各科に信頼される縁の下の力持ち

放射線部は、放射線診断科、放射線治療科をはじめとする各科医師と協力し、診療科のニーズに従い、CT、MRI、PETなどの画像および血管造影・IVRなどを提供することで、診療に貢献しています。

診療体制

大きく画像診断、放射線治療、血管造影・IVR、RI診療の4部門に分かれており、放射線技師、放射線診断科・放射線治療科医師、中央診療部看護師を中心に、各科医師とも連携し、放射線診療業務を担当しています。

業務の特徴と実績

■画像診断部

X線を用いた撮像業務をはじめ、MRI、超音波を含め700件近く施行しています。またMDCT、MRIの断層画像では高精度画像（3D image、仮想内視鏡、CT angioなど）も提供しています。

■放射線治療部

通常の照射に加えて、ラジオサージェリー、定位放射線照射、強度変調放射線治療、腔内照射、全身照射などの最先端の照射を行っており、1日100件近くの放射線治療を行っています。

■血管造影・IVR部

経皮的に低侵襲治療を行う血管造影・IVR部門の業務は1日12件を超えています。24時間体制で、ほぼ全身の血管造影・IVRに対応しています。

■核医学部

PETによる脳疾患、心臓疾患、悪性腫瘍の診断を主に1日25件を超える画像診断業務をこなしています。また甲状腺疾患に対する放射性ヨード内服治療も月のべ70件程度行っています。

リハビリテーション部 Rehabilitation Unit

機能訓練から社会復帰援助まで

様々な疾患により身体・精神機能の低下した方々に対し、機能訓練から日常生活動作・職業能力改善・精神面の安定を目的に各専門性を活かし、患者の社会復帰に向けてリハビリテーションサービスを提供しています。

診療体制

入院患者さんと一部の疾患の外来を中心にリハ専任医、理学療法士（PT）、作業療法士（OT）、言語聴覚士（ST）、看護師でチームを組み、幅広い疾患に対してリハビリを展開しています。

対象疾患

脳血管疾患、骨関節疾患（リウマチなど）、神経筋疾患、呼吸疾患、心疾患、小児疾患（脳性麻痺など）、精神疾患（高次脳機能障害、広汎性発達障害）、各内科疾患や各外科術後（移植後など）のADL低下回復など。

診療、研究実績

一般的な診療についての実績

年間実施件数は、理学療法58,343件、作業療法19,054件、言語聴覚10,059件。

高度医療の取り組み・研究

①理学療法部門
各種評価器（筋力測定器, 筋電図, 呼気ガス分析装置など）を用いた運動機能およびADLの定量的な評価を行い、治療の効果や検証を行っています。

②作業療法部門
手の外科、高次脳機能障害を対象に専門プログラムを導入し、機能訓練から復学・就労支援までのリハビリシステムの構築を目指した研究・検討を行っています。

③言語聴覚部門
耳鼻科・栄養科など他部門と協力のうえ、総合的な嚥下機能障害のアプローチを研究・検討を行っています。

デイ・ケア診療部 Day Hospital, Department of Psychiatry

早期回復から生活の自立をめざして

精神疾患により心身の機能に不調をきたした方々に対し、入院中から退院後まで連携して作業療法、デイ・ケアプログラムを行い、就労、生活の自立に向けて精神科リハビリテーションサービスを提供しています。

診療体制

入院患者には精神科作業療法、外来患者にはデイ・ケアが担当し、いずれも医師、看護師、作業療法士、臨床心理士がチームを組んで、入院から退院まで連携をとりながらリハビリテーションプログラムを進めていきます。

対象疾患

統合失調症、うつ病、躁うつ病などの気分障害、パニック障害や強迫性障害、社会不安障害などの神経症性障害、摂食障害、てんかん、広汎性発達障害等の精神疾患。

診療、研究実績

一般的な診療についての実績

精神科リハビリテーションの年間実施件数は、精神科作業療法が約4,800件、デイ・ケアが約3,500件（ショート・ケアを含む）です。

高度医療の取り組み・研究

○統合失調症のための認知行動療法プログラム
統合失調症患者に対してグループで認知行動療法を導入することで、自立した生活、就労を目指した取り組みを始めています。

医療器材部 Linen and Appliance Supply

安全で効率的な医療器材の供給をめざして

材料部門では院内で使用された器具の洗浄や滅菌、医療材料の供給を担当。機器部門では臨床工学技士が人工呼吸器など医療機器の点検や手術、人工透析で使用される生命維持装置の操作を担当しています。

業務内容

■材料部門業務

①供給センターでは、院内で使用する医療材料などをラベル管理で供給。また、滅菌センターでは院内で使用された医療器具の回収、洗浄、滅菌、供給を担当しています。

②安全・高品質な材料をスムーズに供給するため、関連スタッフの教育支援や環境整備、各部署間の調整を行っています。

■機器管理業務

①院内で使用される人工呼吸器、輸液・シリンジポンプを中心に中央管理をしています。

②機器の定期的保守点検を行い、正常に動作する機器のみが貸し出されるシステムを構築しています。

③医療スタッフに対して機器の適正な使用方法などの教育を行い、安全性の向上に努めています。

■診療支援業務

①手術部や人工腎臓部などにおいて、臨床工学技士が生命維持装置（人工心肺、透析装置、高圧酸素治療装置）の操作や麻酔器、内視鏡、患者監視モニターなどの機器管理を行っています。

②各部門のスタッフと協力し、検査や診療がスムーズに行われるようサポートしています。

輸血細胞治療部 Transfusion Medicine and Cell Therapy

安全で効果的な輸血医療をめざして

輸血製剤（赤血球濃厚液、血小板、新鮮凍結血漿）や手術患者より採血した自己血輸血用血液を管理･検査･供給しています。各種移植医療に対応しHLAタイピングやHLA抗体、リンパ球クロスマッチなどの組織適合試験においては高感度法を導入しています。

診療体制

輸血学会認定医師1名、認定臨床検査技師2名を中心に、輸血製剤の検査･管理･供給を臨床検査技師が行います。自己血の採取は医師の主導のもとに行っています。

対象疾患

輸血製剤（同種血）は、各種輸血を必要とする手術患者や抗がん剤治療を受ける患者さんに用いられます。また自己血は待機的手術患者さんが対象となります。

診療、研究実績

一般的な診療についての実績

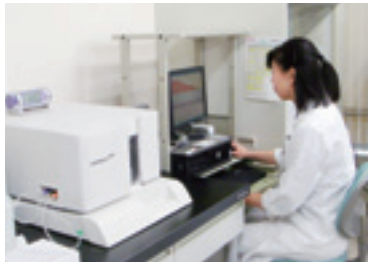
年間約7万単位の輸血製剤を供給。毎年延べ700～800回（患者数約300人）の自己血を採取･供給。400例以上のHLA検査や200例以上の血漿除去血小板製剤の調整を行っています。

高度医療の取り組み･研究

①超迅速な抗A/B抗体測定方法の開発
ABO型の一致しない提供者からの臓器移植を受けた場合、抗A/B抗体量を測定し、低値にコントロール。従来3時間を要したところ、15分で信頼性の高い検査方法を開発し利用しています。

②生体肝移植時の輸血療法の検討
生体肝移植時の輸血療法やHLA抗体と拒絶に関してデータを整理･解析し、臨床に役立てています。

③先端医療開発
白血病をはじめとする悪性腫瘍に対する分子標的治療の開発、造血幹細胞移植や造血制御に関する研究。



分子細胞治療センター Center for Cell and Molecular Therapy

細胞治療～基礎研究と臨床の架け橋～

組織移植や再生医療に利用される細胞や組織を得るために、ヒトから摘出された臓器から特定の機能を持つ組織の分離を行ったり、ヒトの血液中や骨髄液から取り出された細胞の培養などの処理を行っています。

施設内の設備

センター内には3つのクリーンルームが設置されています。センター内での作業はすべて無菌的に行われ、組織や細胞が汚染を受けたり、品質が低下しないように様々なシステムを使って品質管理がなされています。

対象疾患

膵島移植（移植外科）や樹状細胞を用いた細胞免疫療法（血液･腫瘍内科）のほか、骨再生治療（整形外科･再生医科学研究所）や自家培養真皮を用いた創床形成療法（形成外科）などの臨床研究が行われています。

管理体制

患者さんへ移植される細胞や組織は、医薬品と同様に高い品質と安全性の確保が求められます。そのためセンター内の管理体制は医薬品などの製造と同等の基準に準拠して行われ、製造部門と品質管理部門がそれぞれ独立した体制で運用されています。

周産母子診療部　Maternal and Perinatal Care Unit

お母さんと赤ちゃんに質の高い安心・安全な医療を提供

高度な専門性と綿密な管理の要求されるハイリスク妊娠や妊産婦救急に24時間対応。妊娠中から育児期まで助産師によるきめ細やかな対応でお母さんを支援。新生児の異常の早期発見・治療と新生児集中治療部を卒業した児の管理。難治性不妊症の治療。

診療体制

産科部門は常勤医13名（産科専任3 ～ 4名）、医員・専攻医約10名、助産師24名が24時間体制で診療に従事。生殖医療部門は2名の専属医師、新生児部門はNICU医師が担当。

対象疾患

産科部門：正常妊娠、SLEなど各種内科疾患合併妊娠、妊娠合併症、常位胎盤早期剥離など産科救急疾患、胎児疾患、異所性妊娠、産科感染症など。生殖医療部門：不妊症全般、不育症。新生児部門：低出生体重児、黄疸、新生児一過性多呼吸、感染症など。

診療、研究実績

一般的な診療についての実績

産科部門では年間約300件の分娩を取り扱っており、その半数以上がハイリスク妊娠です。また年間約50件の周産期救急搬送を受け入れています。生殖医療部門では主に難治性不妊症を対象に約100件の体外受精を行っており、良好な成績を得ています。

高度医療の取り組み・研究

①胎児発育不全、妊娠高血圧症候群の発症機序と予防法の解明
重症胎児発育不全症例や重症妊娠高血圧症候群の周産期予後の改善を目指し、その発症機序と子宮内環境の悪化に対する胎児・胎盤の防御機構について研究をすすめています。

②顕微授精や胚盤胞移植を用いた高度補助生殖医療
凍結融解胚移植、顕微授精、胚盤胞移植、Vitrificationなどの手法を用いて、男性因子や難治性不妊症を対象に、移植周期あたりの妊娠率24.2%と良好な成績を得ています。

人工腎臓部　Division of Artificial Kidneys

あらゆる血液浄化療法を行います

末期腎不全患者の血液（濾過）透析、肝不全や自己免疫疾患などに対する血漿交換療法、急性中毒や高脂血症・神経疾患などに対する血液吸着療法など幅広い分野にわたる血液浄化療法を行っています。また内シャントの作成・再建も行っています。

診療体制

腎臓学会・透析学会専門医8人を含む医師9人が診療。血液浄化療法、輸液管理や薬剤投与、食事療法などに関する他科医師の相談に応じています。薬剤師・栄養士などと協力し、患者さん1人1人に病気や治療法についての説明を行っています。

対象疾患

急性腎不全・慢性腎不全に対する血液（濾過）透析と腹膜透析。肝不全、薬物中毒、各種自己免疫疾患に対する血液吸着および血漿交換療法。家族性高コレステロール血症・閉塞性動脈硬化症に対するLDL吸着療法、血液型不適合の移植例に対する抗体除去。関節リウマチ・クローン病に対する白血球除去療法。

診療、研究実績

一般的な診療についての実績

年間の血液透析回数3,539回、血液濾過透析537回、血漿交換66回、血液吸着38回です。内シャント作成回数は71回。年に18回腎臓病教室を開催し、参加者数は110名です。腹膜透析外来にて約20名の患者さんを2週間ごとにフォローしています。

高度医療の取り組み・研究

○モニター機器を用いた安全な透析療法
術前術後の患者・透析困難症の患者さんに対し、クリットライン・マルチチャンネル体脂肪計等の機器を用いて循環血漿量と体液量をモニターしながら血液浄化療法を安全にすすめています。

病理診断部　Department of Diagnostic Pathology

先進医療を支える確かな視線

身体から採取された組織の構築や細胞の形態を顕微鏡で観察し、様々なタンパク質・核酸の局在を調べて診断をつけるのが病理診断部の仕事です。様々な疾患・臓器を専門とする病理医が各診療科のニーズに応えます。

診療体制

総勢20名を超える病理医・臨床検査技師・細胞診検査士の協同作業により標本作製から診断までを迅速に行います。テレパソロジー(遠隔病理診断)による関連施設の診断サポートも行っています。

対象疾患

移植臓器、造血器、皮膚、脳腫瘍、頭頸部、呼吸器、循環器、乳腺、女性生殖器、泌尿器、男性生殖器、腎病理、消化器、内分泌臓器、骨・軟部、小児の各疾患

診療、研究実績

一般的な診療についての実績

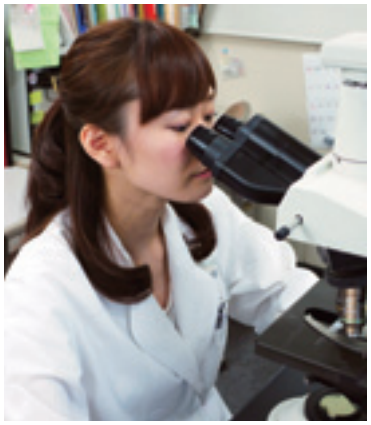
年間の院内診断件数：病理組織約12,000件、うち術中迅速診断約1,000件、他施設からの持参標本約600件。細胞診約14,000件、うち術中迅速約500件、他施設からの持参標本約100件、病棟・手術室への出向約150件。病理解剖約50件。

高度医療の取り組み・研究

①肝移植・小腸移植におけるグラフト拒絶反応の研究
抗ドナー抗体による拒絶反応、慢性肝炎型の拒絶反応、小腸拒絶反応におけるNKT細胞の役割について発表しています。

②子宮悪性腫瘍の研究
HPV陰性の子宮頸部腺がんについての診断基準を確立し生物学的態度を明らかにしました。

③リンパ増殖性疾患の研究
移植後リンパ増殖性疾患やIgG4関連疾患の臨床病理学的な特徴を明らかにしました。



疾患栄養治療部　Metabolism and Clinical Nutrition

栄養のスペシャリストとして

「食事・栄養」が健康に及ぼす影響は非常に大きく、臨床学的根拠に基づいた栄養管理を実践し、これまでの各疾患や術後に伴う低栄養に加え、近年急増している過剰栄養にも対応した栄養指導や食事管理で患者さんの治療に努めています。

業務体制

管理栄養士13名で外来、入院患者さんへの栄養指導や食事の調整、給食部門の委託管理、給食管理など病院における栄養管理業務の全般を行っています。また、医師・看護師・薬剤師・検査技師などと共同で、NST活動や、褥瘡対策など病院全体の栄養管理も行っています。平成22年6月1日より入院患者の食事を安全に提供するため、加熱調理直後に各料理を急速冷却し、提供直前に再加熱する「ニュークックチルシステム」を採用しております。

対象疾患

糖尿病、脂質異常、肥満、心臓病、腎臓病、炎症性腸疾患(IBD)、食思不振ほか、全疾患に対応。年間1万件程度の栄養指導件数は、全国国立大学病院一の件数を維持しています。また各疾患別の集団教室では、調理実習や食事会もあり患者さんから好評です。

その他の取り組み

①栄養のスペシャリストとして、病態栄養専門師、糖尿病療養指導士、健康運動指導士などの資格を取得したスタッフも多く、各種業務に活かしています。

②日々の研鑽成果をまとめ、病態栄養学会、栄養改善学会、糖尿病学会、褥瘡学会などへ発表も行っています。

③臨床栄養学実習生および研修生の受け入れ、他大学などと連携した院外での調理実習など大学病院教育機関としての役割や、患者会への応援、院内外の医療スタッフに対しての公開勉強会など地域連携の拠点としての役割も担っています。

集中治療部 Critical Care Medicine

24時間体制で重症患者を集中管理

集中治療部は大手術を受けられた方や、重篤な疾患によって生命の危機に陥られた方を収容し、各診療科との協力の下に集中的な治療と看護を行っています。

診療体制

集中治療専従スタッフ3名、麻酔科との協力で24時間対応。患者担当科医師に加え、各専門診療科の協力で包括的、集学的な診断・治療を行っています。また、患者2名に対して1名の看護師を配置し、きめ細かいケアを行っています。

対象疾患

例えば、心臓、食道、肝臓、膵臓などの大手術や、病棟での管理が難しい合併症を有する症例の術後管理。病棟で発症した呼吸不全、循環不全、凝固障害、敗血症、ショック、多臓器不全など。

診療、研究実績

一般的な診療についての実績

年間入室者数は約700名で、手術後の入室が約500名、病棟からの入室が約200名です。人工呼吸、気管支鏡検査、エコー検査、各種血液浄化法、脳低体温療法などを患者の病態に応じて行っています。

内視鏡部 Department of Endoscopy

最先端の内視鏡を使って体の中から低侵襲で病気を診断し治療します

消化器疾患、呼吸器疾患の診断と治療に内視鏡は欠かせず、病気の早期発見から、各種疾患の病態把握、そして根治から症状緩和のための治療まで、その幅は極めて広く、消化器および呼吸器診療において極めて重要な役目を担っています。

診療体制

消化器内視鏡部門は、消化器内科が中心に月曜から金曜まで終日検査と治療を行っています。気管支鏡部門は呼吸器内科と呼吸器外科が分担して検査と治療を行っています。緊急内視鏡は24時間体制で受け入れを行っています。院内の内視鏡洗浄と保守管理をセンター化し、最先端の安全・感染対策を実践しています。

対象疾患

咽喉頭癌、食道（食道炎、癌）、胃・十二指腸（炎症、潰瘍、癌）、小腸（炎症、出血）、大腸（ポリープ、癌、潰瘍性腸炎、クローン病）、胆道（結石、癌）、膵臓（炎症、癌）、肺・気管支（炎症、癌、慢性呼吸器疾患）などの診断と治療。

診療、研究実績

一般的な診療についての実績

平成22年度の通常内視鏡検査（上部、下部、超音波内視鏡、逆行性膵胆管内視鏡、気管支鏡含む）は、9,500件以上、内視鏡的腫瘍切除（咽頭、食道、胃、大腸）約360件、気管支鏡検査は約460件を行っています。また、苦痛のない内視鏡検査・処置ができるように希望者には鎮痛剤・鎮静剤を使用しています。

高度医療の取り組み・研究

①食道癌化学放射線療法後の遺残・再発に対する救済レザフィリンPDT
食道癌に対する化学放射線治療後の残存病変に対する新しい低侵襲救済治療として、新しい光感受性物質と半導体レーザを用いた光線力学療法（PDT）の開発を行っています。

②肝移植後の胆道合併症に対する内視鏡治療
世界屈指の生体肝移植を実施する肝胆膵・移植外科と協力、肝移植後の胆道合併症に対し内視鏡的治療を行い、移植医療を全面的にバックアップしています。

③超音波気管支鏡（EBUS）を用いた傍気道病変の診断
腫脹した縦隔リンパ節や気道に接する肺腫瘍、縦隔腫瘍に対する、低侵襲かつ安全な診断法としてEBUSを用いた検査を積極的に行っております。従来の縦隔鏡と異なり、局所麻酔で行えるというメリットがあります。

臓器移植医療部　Organ Transplant Unit

移植医療のスペシャリスト集団

生体・脳死肝移植、膵臓移植、膵島移植、生体・脳死小腸移植を行っています。関連業務として、術前準備、レシピエント登録、病理診断、薬物血中濃度モニタリング、HLA検査、移植コーディネーター業務も行っています。

診療体制

移植外科医（5名）、消化器内科医（1名）、病理医（1名）、移植コーディネーター（4名）、事務補佐員（2名）で構成されています。各スタッフがそれぞれの専門分野を担当し連携しながら、術前評価から周術期管理、長期フォローまで担当します。

対象疾患

①肝移植：胆道閉鎖症、代謝性疾患、劇症肝炎、肝硬変、肝細胞癌など
②膵臓移植：重症糖尿病、糖尿病性腎不全（膵腎同時移植）
③小腸移植：短腸症候群、機能障害による小腸不全など
④膵島移植：重症糖尿病、慢性膵炎

診療、研究実績

一般的な診療についての実績

肝臓移植は、これまで1,500例以上施行し、特に生体肝移植は国内年間施行例の約20%を占めています。膵島移植は2004年にわが国初の移植を施行してからこれまで22回の移植が10名（生体移植1名を含む）に行われました。

高度医療の取り組み・研究

○膵島移植、膵島分離
膵島移植は、2010年11月1日に高度医療（第3項先進医療）に承認されました。また、各移植において、臨床研究及び基礎研究を実施しています。

デイ・サージャリー診療部　Day Surgery Unit

日帰り手術で入院期間を最短に

日帰り手術と短期入院手術を行っています。患者さんが安全かつ安心して手術（検査や処置も含めて）を受けることができ、手術中のみならず、手術前から手術後までのきめ細かいケアを提供できる体制を構築しています。

診療体制

各診療科専門医が手術を行います。専任の看護師（17名）と麻酔科専門医（3名）が外来・病棟（短期入院の場合）の医師・看護師と連携して、手術前、手術中および手術後のケアを提供しています。

対象手術

鼓膜切開チューブ挿入術、扁桃摘出術、喉頭微細術、インプラント、子宮鏡・子宮頚部手術、膀胱鏡・関節鏡手術、手足変形修復術、乳腺手術、痔、ヘルニア手術、電気痙攣療法、諸種の皮膚・形成外科手術など。

診療、研究実績

症例

手術（処置・検査を含む）総件数は約4,000件、うち麻酔科医が管理する（全身麻酔、脊髄クモ膜下麻酔や神経ブロックなどで行う）手術は約1,500件です。

高度医療・臨床試験

①各診療科の高度医療・臨床試験に協力しています。
②各診療科と協力して、手術・麻酔に伴う合併症ゼロ、入院日数短縮、患者さんの早期社会復帰など、高い医療の提供をめざして研究を行っています。

遺伝子診療部 Clinical Genetics Unit

遺伝医療をもっと身近に!

「遺伝に対する心配事がある」「私自身か、今妊娠中の赤ちゃんに、将来遺伝病が出るのではないでしょうか」など遺伝や遺伝子に関する相談（遺伝カウンセリング）を行っています。また、必要に応じて遺伝子診断を行っています。

診療体制

具体的な診療・相談の内容に応じて、遺伝医療を専門とする各領域の専門医（臨床遺伝専門医）5名や、それに準じた医師が遺伝カウンセリングを行います。また、看護師や臨床心理の専門家、認定遺伝カウンセラーが必要に応じてサポートします。

対象疾患

遺伝性疾患や遺伝子変異による疾患全般（遺伝子変異による先天異常症候群、家族性腫瘍、妊娠中の胎児の異常、染色体異常症、難聴など）のほか、遺伝全般に関わる相談（ただし、親子鑑定はお受けしておりません）。

診療、研究実績

一般的な診療についての実績

年間100件以上の相談者が遺伝カウンセリングに訪れています。また、必要に応じて遺伝子検査に関する説明を行って、検査を実施しています。院内の他の診療科や他施設とも連携して遺伝子診療に当たっています。

高度医療の取り組み・研究

①家族性腫瘍（家族性大腸ポリポーシス、遺伝性非ポリポーシス大腸がん、遺伝性乳がん・卵巣がん）

②難聴遺伝子検査（遺伝性難聴）

③先天異常症候群遺伝子検査（遺伝子変異の検出とアレイCGH検査による微細なDNA欠失と重複の検査）

感染制御部 Department of Infection Control and Prevention

感染管理のエキスパート集団

感染対策チーム（ICT）を基盤として組織された部局で、検査部との緊密な連携のもと、病院内で発生するあらゆる種類の感染症の診療に携わっています。感染対策全般を受け持つ組織であるICTの中核でもあります。

診療体制

感染症専門医（ICD）7名、感染対策専任看護師長（ICN）1名、看護師4名、検査技師、薬剤師、放射線技師で構成。包括的かつ適正な感染症診療と感染対策の実施や、予後の改善、医療コストの削減、耐性菌の減少をめざしています。

対象疾患

各診療科からの感染症コンサルテーションのほか、検査部との連携により重篤、かつ特別な対応が必要な感染症、あるいは院内感染対策が必要な感染症を迅速に把握し、最新のエビデンスに基づいた感染症診療と感染予防対策を行っています。

診療、研究実績

一般的な診療についての実績

平成22年度の全感染症診療実績は約1,000件。うちコンサルテーションと血液培養陽性例が各々400件を超えています。抗菌薬については、薬剤部TDM室と連携し、グリコペプチド系薬やアミノグリコシド系薬などの適正使用を図っています。

高度医療の取り組み・研究

①薬剤耐性菌に関する研究
多剤耐性緑膿菌やバンコマイシン耐性腸球菌（VRE）、市中感染MRSAなどの薬剤耐性菌に関する基礎および臨床研究を行っています。

②免疫不全者における感染症の診断・治療・予防に関する研究
臓器・造血幹細胞移植や免疫レギュレーター治療などに伴う感染症の診断と治療、感染予防に関する研究を行っています。

③新たな感染症検査法の評価および開発
新しい遺伝子増幅技術による結核の早期診断、結核感染の新しい診断キットであるQFTの評価、他新たな感染症検査法の評価および開発を行っています。

④病院感染対策の実施（職業感染予防を含む）
MRSAなどの薬剤耐性菌をはじめとし、伝播リスクのある様々な細菌、ウイルス性感染症などへの感染対策に関する情報をできる限り早期に把握し、的確な指示やマニュアルにより感染拡大防止を図っています。また、主要な施設内感染症（耐性菌、中心静脈カテーテル感染、創部感染など）のサーベイランス調査から得られる指標の推移を常時監視し、必要に応じて改善のための介入を行っています。さらに、ワクチンや針刺し・血液曝露対策などの職業感染予防をマネージメントしています。

外来化学療法部 Outpatient Oncology Unit

安全で快適な人と空間。シームレスで高度ながん医療の提供

京大病院におけるあらゆるがんに対する通院での化学療法を行っております。スタッフ一同、抗がん薬治療を通じて、全てのがん患者さんとご家族に、最高の治療とケアを受けて頂けるよう心がけております。

診療体制

抗がん薬治療専門のがん薬物療法専門医・がん化学療法看護認定看護師・がん専門薬剤師の各職種からなる専門チームが中心となって、各診療科とも密に連携し、診療を行っております。

対象疾患

肺癌・乳癌・悪性リンパ腫・MDS・大腸癌・膵癌・胃癌・食道癌・胆道癌・肝癌・頭頸部癌・子宮癌・卵巣癌・腎癌・膀胱癌・小児癌・脳腫瘍・肉腫・原発不明癌などあらゆる癌腫を対象に、通院での抗がん薬治療と副作用の対処を専門的知識を生かして積極的に取り組んでいます。

診療、研究実績

一般的な診療についての実績

平成22年度の新規紹介患者数：448人(消化器がん 179人・肺がん 179人・乳がん 59人・リンパ腫 58人・その他 31人)で、のべ通院患者数：11,796人・のべ抗がん薬投与患者数：9,562人で、最近はほぼ横ばいです。

高度医療の取り組み・研究

①化学療法のデータベース管理とリアルタイムアウトカム評価システム

病院電子カルテと連動したデータベースシステムを構築し、全ての診療科における化学療法時の有害事象等の治療情報をデータベース化して、アウトカム評価を行っています。

②ゲノム薬理学を用いた効果的かつ副作用の少ない個別化治療の開発

エビデンスに基づいた標準治療を外来で行うとともに、データベースシステムと連動して、ゲノム薬理学を用いた治療効果や有害事象を予測し、至適な個別化治療の開発を行っています。

心臓血管疾患集中治療部(CCU) Cardiovascular Care Unit

すべての患者さんに思いやりのある最良の医療を・・・

重症の心臓血管疾患に対応する念願のCCU 6床が、平成18年6月1日に開設されました。地域の病診連携・病病連携についても、救急処置を要する循環器疾患に、より迅速に対応できるよう努力しています。

診療体制

紹介医院・病院や救急隊からの要請に、より速やかに対応し、患者さんがあらゆる重症心臓血管疾患から救命および社会復帰されるよう全力を尽くし、24時間集中管理体制の下、安全で質の高い医療を提供しています。

対象疾患

急性心筋梗塞、不安定狭心症、急性大動脈解離、急性心不全、慢性心不全急性増悪、肺塞栓、重症不整脈、心肺停止、急性心筋炎、心臓血管外科手術後など。

目標

24時間365日救急要請により速やかに対応し、患者さんに対して最良の高度医療を提供しています。

女性のこころとからだの相談室 Consultation Room for Women's Mental and Physical Health

女性とその家族のためのこころとからだの相談室

医師に相談するほどでもないが、自分では解決できない問題を持つ女性や、専門家にゆっくり時間をとって相談したい女性およびその家族を対象として、こころとからだの両面から総合的に相談に応じています。

診療体制

産科分娩部勤務の助産師が担当している「ママ・ベビー相談」と、保健師、助産師、看護師、理学療法士、作業療法士、臨床心理士の資格を持つ医学部保健学科の教員が担当する「相談室」の2本立てで相談を行っています。

対象疾患

女性の心理的諸問題、更年期障害、月経異常、妊娠・不妊、母乳・育児、子供の療育、リンパ浮腫に対するセルフケア、睡眠問題、中高年者の健康増進などに関する相談が対象です。

診療、研究実績

相談内容および担当職

①心理的諸問題
臨床心理士が抑うつ症状、引きこもり・不登校、摂食障害などの悩み相談を受けています。

②身体的諸問題
更年期の女性ホルモンの乱れ症状、思春期・青年期女性の月経異常、性に関する相談を受けています。

③妊娠・不妊問題
助産師が妊娠中により快適な生活を送るためのアドバイスなどを行っています。

④疾患問題
看護師・保健師が手術後、慢性静脈不全などによるリンパ性浮腫に対するセルフケアを指導しています。

⑤子どもの発達相談
理学・作業療法士が脳性麻痺など運動発達の障害や学習障害などをもつ子供を対象とした相談を受けています。

⑥睡眠・住環境相談
保健師がより健康な睡眠をとるため、快適な生活を送るための住環境などの相談を受けています。

⑦中高年の健康増進
理学療法士が中高年者の体力づくり、身体機能に障害がある方への運動・リハビリ指導をしています。

新生児集中治療部(NICU) Neonatal Intensive Care Unit

エビデンスに基づく高度な新生児医療を提供

京都の新生児の基幹病院として、重症児を中心に高度な医療を提供。エビデンスに基づく適格な医療をモットーに、超低出生体重児の後遺症なき生存の診療成績は大規模な総合周産期センターの成績に匹敵します。

診療体制

2010年にNICU9床・GCU12床へと増床し、約10名の新生児専属医師と約30名の看護師(助産師を含む)が、分娩部をはじめとする院内関連科と緊密に連携して24時間体制で診療にあたっています。

対象疾患

低出生体重児(超低出生体重児などを含む)、仮死・感染症などの周産期の異常による病態。外科疾患(横隔膜ヘルニア・消化管閉鎖症など)、心臓外科疾患(先天性心疾患など)など他科との連携を要する疾患が対象です。

診療、研究実績

一般的な診療についての実績

年間入院数は150 ～ 200名。約30名を極低出生体重児が占めており、その救命率は95%を超えています。母体搬送後の出生児を含めると院内出生が80%以上を占めますが、外科疾患・心臓外科疾患の新生児搬送も広く受け入れています。

高度医療の取り組み・研究

①新生児内分泌研究
京都大学NICUは日本の新生児内分泌学の中心に位置し、常に臨床に直結する新たな情報を発信すべく、甲状腺・副腎皮質・ストレス応答などに着目した研究を行っています。

②発達研究
京都大学教育学部・同志社大学赤ちゃん学科などと連携し、NICUの医療環境がもたらす発達への影響・早産児の発達過程などについて研究しています。

高度治療部 High Care Unit

重症患者さんの安全な治療と一般病棟へのスムーズな移行を目指します

診療体制

６ベッドの集中治療ユニットです。肝胆膵･移植外科と心臓血管外科の術後重症患者さんの集中治療を行っています。設備はICUに準じた設備を整えており、人工呼吸器、人工透析、心電図モニター、エコーなどの検査機器など完備しています。看護体制は2～3名の患者さんに1名の看護師が看護に当たっています。

対象疾患

肝胆膵･移植外科と心臓血管外科の術後重症患者さんが中心ですが院内の重症患者さんで適応のある方は広く治療に当たっています。人工呼吸管理はもとより、人工透析、血漿交換なども行い、ＩＣＵからのステップダウン病床として長期管理も含めた治療を行っています。

医療情報部 Medical Informatics

最先端の情報技術で高度先進医療をサポート

京大病院の高度な医療を、情報技術（電子カルテやウェブ、映像配信技術）でサポートします。また、情報技術の可能性を追求し、最先端および次世代の医療を提案します。

業務体制

5人の教員（教授･准教授･講師･助教･特定助教）と外部スタッフ3名、事務部経営管理課･医療情報管理掛とともにネットワーク利用サポート、病院情報システムの保守･運営を行っています。また、病院の情報基盤を預かっていることから、病院運営にも深くかかわっています。

対象業務

情報支援戦略全般の立案、病院情報システムの改良、新サービス立案･設計、院内ウェブサービスの提供、ネットワークセキュリティ監視などを実施しています。

診療、研究実績

一般的な診療についての実績

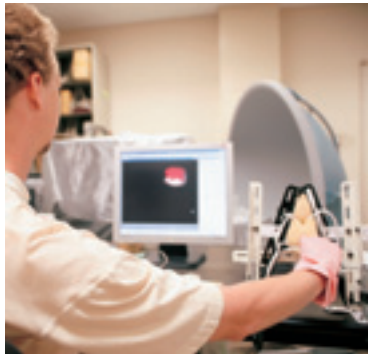
病院情報システムの企画･導入･運用を行っています。また、院内業務のみならず、地域の医療連携を目指し、医療機関の枠組みを超えた「どこでもカルテ」の仕組み（まいこネット）を構築しました。

高度医療の取り組み･研究

①医療経営･マーケティング
病院の効率的運営のために、原価計算、マーケティングなどの経営的な視点が求められつつあります。患者の受療行動の観点から、地域内ばかりでなく、世界的な患者動態を視野に入れた調査を行っています。

②診療情報の効率的な取得および再利用に関する研究
病院で発生する情報は全て何らかの意味を持つ情報であり、また膨大な情報が蓄積されつつあります。そこから新しい知識を獲得することで、過去の診療情報の利用や、新しい診断基準などの自動獲得を目指しています。

③VRを用いた手術技能訓練環境の研究･開発
人工現実感（VR:Virtual Reality）を用い、仮想の人体に触れながら手術の練習をするための体感型の手術訓練シミュレータの開発を行っています。



看護部 Nursing

その人らしさの尊重とチーム医療のコーディネートを重視し、患者さんひとり一人に行き届いた看護を提供

健康増進と疾病予防、健康の回復、苦痛の緩和という看護部の基本的責任を果たすため、人々を全人的にとらえ、看護の専門性をもって主体的に働きかけます。その具体化のために、患者中心性、安全性、有効性、適切性、効率性、公平性を活動方針としています。

看護の質の向上

継続的で一貫性のある看護を目指し、看護の標準化を図るとともに、いかなる場面でも看護の基本的役割が発揮できるジェネラリストの育成を図っています。また、安全で質の高い看護を提供するため、専門的な活動を推進するスペシャリストの確保、育成も行っています。高度な専門性を必要とする領域については、その分野に特化した技術・知識を有した専任看護師を配置し、以下の分野で活躍中です。

■「がん看護」

がんサポートチームでの緩和ケアのコンサルテーション活動、化学療法や放射線療法を中心としたがん治療の看護を現場のエキスパートナースとともに行っています。

■「感染管理」

専任の感染対策者および院内感染対策チーム（ICT）の一員として、感染対策を組織横断的に行っています。

■「退院支援」

患者さんが退院後も安心して療養継続ができるよう、どのような医療管理・看護が必要かを考え、患者さんの自己決定支援ができるよう、必要な教育・コンサルテーションを行っています。

■「褥瘡対策」

褥瘡専従管理者として、褥瘡対策チームの中心的役割を担い、部門の壁を越えた横断的な活動を展開しています。

■「治験コーディネーター」

治験患者用クリニカルパスを作成し、ケアの実践と治験の円滑な実施に努める中、契約治験件数も増加の傾向にあります。

■「看護システム」

電子カルテシステムの中で、患者さんの療養生活支援に必要な情報を集積、整理するとともに、情報をチームでタイムリーに共有し、看護業務の標準化・効率化と、誤認防止など医療安全の向上を推進しています。

また、特定の看護分野について豊富な経験と高度な知識を持った認定看護師を配置しています。（「感染管理」「皮膚・排泄ケア（WOC看護）」「がん化学療法」「集中ケア」「糖尿病看護」「透析看護」「新生児集中ケア」「手術看護」「緩和ケア」「摂食・嚥下障害看護」「がん放射線療法看護」の11分野）。

看護師の養成

本学人間健康科学科看護学専攻をはじめ、様々な養成課程での臨地実習を積極的に受け入れ、学生が安全かつ効果的に実習できる環境を整えています。臨床では、看護実践を通して学生の持つ課題について、個々の患者さんに適した看護ケア提供が学べるよう、実習指導者を中心に支援を行っています。

看護師の研修

看護師として生涯成長していくためのマングローブ型キャリアパスを構築し、ジェネラリストとして足腰を鍛えるための卒後3年間の段階的研修や、ひとり一人の目標に焦点をあてたレベルアップ研修、エキスパート研修などを準備しています。また、独自のクリニカルラダー認定制度を有し、キャリアサポートに活かしています。

働きやすい職場づくり

ボトムアップ型の組織づくり、超過勤務の縮減、有給休暇、夏季休暇の取得推進、交替制勤務の検討など、看護師の働きやすい環境を整え、離職防止に努めています。

看護部理念

1. 私たちは、常に患者の立場に立ち、その信条、人格、生活、権利を尊重します。
2. 私たちは、患者に必要な情報の入手を助け、患者の意思決定を支援します。
3. 私たちは、可能な限り高い水準の看護を提供するために、個人としてまた、組織として継続学習を推進します。
4. 私たちは、看護実践の水準を高める研究活動を推進し、卓越した診療・教育・研究を行う本院の使命の達成のために協働して取り組みます。
5. 私たちは、チーム医療の一員として、他部門と信頼関係に基づいた協働を図り、病院運営に積極的に参画します。
6. 私たちは、看護活動を通して国民の福祉に貢献します。
7. 私たちは、社会的地位の向上のために、積極的に専門職としての活動を行います。

薬剤部 Pharmacy

薬に関わるすべてのことに

薬剤部は「薬に関わるすべてのことに責任をもつ」というポリシーで、医薬品の適正使用・リスクマネジメントを通じて京大病院において安心・安全で効果的な薬物治療が提供できるよう支援しています。そのため、先進的な薬剤業務を展開するとともに、大学病院として高度医療の開発・実践に取り組み、資質の高い医療専門職の養成にも注力しています。

安心・安全で効果的な薬物治療への貢献

■業務展開

処方せん鑑査・調剤、院内製剤、医薬品の供給管理、医薬品情報管理といった従来からの薬剤業務を基本としながら、薬物血中濃度モニタリングに基づく投与設計、抗がん剤の投与レジメン管理と無菌調製、治験管理など新たな業務も拡充しています。また、電子カルテシステムや薬剤オーダーチェックシステムなどIT技術を活用し、業務の正確性・効率性を追求しています。

■病棟業務の推進

すべての病棟に担当薬剤師を配置し、患者さんをケアする医療チームの一員として、薬歴管理、服薬説明、薬効・副作用モニタリングなどの薬学的管理を行っています。

■チーム医療への参画

感染対策チーム（ICT）、褥瘡対策チーム、栄養管理チーム（NST）、がんサポートチームなど高い専門性を有する医療チームに参画し、薬剤師の職能を活かした貢献をめざしています。

高度医療の開発と実践

■薬物療法の個別化をめざして

免疫抑制剤や抗がん剤などについて、薬物血中濃度モニタリングに加え薬物動態関連遺伝子の発現量測定や遺伝子多型解析を行い、個々の患者さんに最適な投与設計法の確立に取り組んでいます。

■新たな治療薬の開発をめざして

文部科学省橋渡し研究支援プログラムにおいてトランスレーショナル・リサーチをサポートするため、特殊無菌製剤室では先進医療をはじめとした臨床試験薬の製造などを行っています。

資質の高い医療専門職の養成

■医師の養成

全国の大学に先駆けて、医学部学生に対する講義・臨床実習を担当し、医薬品の安全管理と適正使用の教育に力を入れ、薬物療法に精通した医師の養成に貢献しています。

■薬剤師の養成

6年制となった薬学部・薬系他大学の学生を対象とした病院実務実習や薬剤師の卒後教育の充実をはかっています。また、日本医療薬学会認定薬剤師制度研修施設、日本医療薬学会がん専門薬剤師研修施設、日本臨床薬理学会認定薬剤師制度研修施設等として認定されており、当院薬剤部職員も多数、学会認定薬剤師やがん等の専門薬剤師として活躍しています。

探索医療センター　Translational Research Center

創薬・臨床開発の研究・管理・支援部門

基礎の医学研究から得られた成果をもとに効果的、効率的に臨床現場への応用までを一貫して行うトランスレーショナル・リサーチを支援するセンターです。創薬・臨床開発の管理・支援部門で、探索医療開発部、探索医療検証部、探索医療臨床部の3部門から構成されています。病院内の他部門や政府・規制当局、民間企業などとの連携を密にとりながら活動。特に、新たな治療法・医薬品などの開発に必須である「医師主導治験」（承認申請を目的に人を対象にした研究）の支援に積極的に取り組んでいます。

実績
医師主導治験、臨床試験、臨床研究の実施支援を行っています。

開発部

Departmenr of Experimental Therapeutics

基礎研究から臨床応用への転換速度の向上をめざして

基礎の医学研究の中で生み出された新しい物質や技術をヒトへの応用に向けて、研究者とともに臨床応用への道筋を探っています。

体制
医師、基礎医学研究者、開発薬事担当者、プロジェクト管理担当者、文書管理担当者、事務担当者を配置しています。

活動
安全性や薬事動態など動物レベルの研究から得られた結果について、研究者とは独立した立場で評価し、臨床応用に向けたスケジュールの管理を行っています。また厚生労働省への対応、候補物質の規格化などの支援、必須文書の管理なども行っています。全国公募で選ばれた流動プロジェクトは探索医療開発部に所属し、基礎医学的な研究成果を臨床に結びつけるための研究を行っています。

検証部

Departmenr of Clinical Trial Design and Management

臨床試験の質向上をめざして

臨床試験の質の管理、信頼性の保証に関する業務を第三者の立場から客観的に行っています。

体制
試験指導医師、生物統計家、データマネジャー（データ管理者）、モニター、システム開発担当者、統計解析担当者、運営事務担当者を配置しています。

活動
臨床試験の計画段階では、研究の倫理的・科学的妥当性、実施可能性などを客観的に評価し、実施段階では、臨床試験の安全性確保と質管理に必須であるモニタリング、データ管理、統計解析の業務を研究者や医師とは独立した立場で行っています。

臨床部

Departmenr of Clinical Innovative Medicine

患者さんの権利や利益を守る倫理的・科学的な臨床試験の実施をめざして

臨床試験のすべての過程を通じて、患者さんの立場に立ち、自由意思に基づく試験参加のお手伝いと診療を行っています。

体制
医師、臨床試験コーディネーター（看護師、薬剤師）、事務担当者を配置し、多職種からなる総合医療チームを形成するとともに、各診療科と連携してさまざまな分野の臨床試験に対応しています。

活動
患者・家族に臨床試験を十分に理解していただけるように、インフォームド・コンセントの支援を行うとともに、検査や試験薬投与の補助など、各部門との業務調整も行っています。また平成17年より、医療倫理についての市民公開講座を開催しています。

■ 地域ネットワーク医療部 Department of Community Network and Collaborative Medicine

患者さんとご家族の思いを大切に

平成12年8月に老年科を中心に『医療・福祉の相談窓口』として創設。患者さんが病気や障害と向き合いながら、自宅や地域で療養生活が継続できるよう支援をしています。退院支援・外来通院患者の在宅療養支援にも取り組んでいます。

体制

医療ソーシャルワーカー6名、看護師2名、医師3名(専任2名)の体制です。また地域医療連携室では地域医療機関からのFAXによる紹介初診患者予約受付業務を担当しています。

支援状況

平成22年度の新規支援依頼総数は815件、うち40%は在宅療養へ向けた退院支援、34%は転院支援、24%が外来通院中の患者・家族への療養・介護支援でした。また、地域医療連携室の利用件数は8,966件でした。

特徴

①病棟・外来からの支援依頼を受けて、医療ソーシャルワーカーと退院調整看護師が協働で退院調整・在宅療養支援を行っています。
②退院調整に関しては、医師・看護師・リハビリスタッフ・緩和ケアチーム等、必要な医療チームで支援するために「初回カンファレンス」を開催し、チームとしての方向性を共有してから支援を開始しています。
③電子カルテの「退院支援」部門プログラムに、医療ソーシャルワーカー・退院調整看護師の支援経過を入力し、他のチームメンバーとタイムリーに情報共有ができます。
④地域の在宅医・訪問看護・ケアマネージャー・地域包括支援センター・行政関係との連携も強化し、必要時『退院前カンファレンス』や地域との研修会を企画・サポートしています。
⑤退院調整看護師の実習・医療ソーシャルワーカーの研修等の受け入れも行い、教育・レベルアップに貢献しています。

■ 治験管理センター Clinical Trial Management Center

未来の医薬品を創る治験

より良い薬を早く患者さんに提供することを目指し、本院で行われる治験がGCP(医薬品の臨床試験の実施の基準)を遵守して円滑に実施されるように取り組んでいます。

業務体制

薬剤部・看護部・検査部・事務部などにまたがる院内横断的な組織です。治験薬管理部門、治験担当事務部門、コーディネーター部門に大別され、19人の専門知識を持つスタッフにより構成されています。

業務内容

製薬企業の依頼による医薬品・医療機器の治験(及び製造販売後調査)、医師主導による医薬品の治験を対象に、治験事務局(治験審査委員会事務局を兼ねる)業務のほか、治験実施における各種サポートを行っています。

業務実績

治験数は年間約90プロトコルです。近年増加している国際共同治験では、プロトコルが複雑な「高度な治験の実施」が要求されていますが、本センターは質の高い治験実践のために中心的役割を果たしています。

医療安全管理室 Patient Safety Division

医療のリスクに、正面から向き合う

医療は本来不確実でリスクを伴うものです。医療安全管理室はこれらのリスクに正面から向き合うとともに、院内で発生した不測の事態をいち早くキャッチし、病院を挙げての治療・再発防止に力を尽くします。

体制

医療安全担当の副病院長が安全管理部長を兼務。安全管理部内に安全管理室が設置され、専従室長（医師）、兼任副室長（副看護部長）、専従師長、事務職員が活動しています。

活動目的

①治療中のトラブルに対し、病院全体で対応できる体制構築
②第三者による調査実施、原因究明と再発防止策の提言
③全部門からのニアミス情報を分析、事故予防策の検討
④院内の安全マニュアル・対応指針などの作成、定期的な見直し
⑤安全講習会による職員の意識と技術の向上
…など、安全で質の高い医療を提供できるように努力しています。

活動実績

①事例調査会・調査報告書：年間約5～6件に対応しています。

②インシデントレポート収集：平成22年度の職員からのレポート総数は9,202件でした。これらの報告を分析し、事故防止に活用しています。

③マニュアル・対応指針などの整備：安全管理スタッフマニュアル、手術室安全管理マニュアルなどに加え、体内異物遺残対応指針、リハビリ時の有害事象対応指針、抗癌剤皮下漏出時の対応指針など、院内データを基にしたオリジナル・マニュアルの作成に関与し、定期的に改訂を加えています。

④安全に関する部門間連携：各部門と定期的にヒヤリハットの検討会を行っています。
院内転倒転落事故防止委員会を結成し、患者の転倒対策にも力を入れています。

総合臨床教育・研修センター Integrated Clinical Education Center

優れた技術と優しい心を育む

医師などの研修プログラムの運営・管理、その評価に基づく改善を行い臨床研修の質的向上に努めています。また院内における教育・研修活動の統括部門として、職種を問わず、高度な医療技術の習得と人間性豊かな医療人育成に向け取り組んでいます。

医師・歯科医師臨床研修プログラムの運営・管理

初期臨床研修と後期臨床研修の運営・管理を行っています。実際の症例に基づいた研修医向けカンファレンスを毎月開催するほか、院内及び協力関連病院の指導医を対象に年２回指導医講習会を開催し、知識と技術の向上を図っています。

メディカルスタッフ研修の運営・管理

年間1,000人を超える有資格者の研修及び学生実習・見学を受け入れ、地域社会に貢献しています。（対象職種：看護師、臨床検査技師、診療放射線技師、理学療法士、作業療法士、管理栄養士、臨床工学技士、精神保健福祉士、医療ソーシャルワーカー、視能訓練士など）

シミュレータの運営・管理

安全で質の高い医療の提供を目指し、シミュレータを用いた技術トレーニングができるようシミュレータの運営・管理を行っています。また、シミュレータを用いた効果的な研修ができるようコーディネートを行っています。

診療報酬業務センター Solutions Center for Health Insurance Claims

全職員の努力をムダなく収入へ！

病院経営の根幹をなす診療報酬業務を集約し、専門性の向上を目指して平成18年４月に設置されました。臨床現場での医療行為が適切に収入に反映される枠組み作りや、適正な診療報酬請求のための情報提供を行っています。また、診療報酬の知識と経験を備えた病院経営を担う人材の育成を目指しています。

体制

病院長の下に設置された部局で、経営担当の副病院長がセンター長を兼ね、教員３名（医師２名）と医務課をはじめとするスタッフから構成されています。診療情報管理士なども含めたさまざまな職種の人間が結集し、めまぐるしく変化する診療報酬制度をスムースに臨床現場に適合させています。月一回の定例会議を中心に、その時々の課題にも対応しています。

活動内容

①診療情報管理士を中心に、大学病院の入院患者の大きな比重を占めるDPCに対応した請求体制を確立させました。その成果は学会発表などを通じて社会に還元し、大学病院としての使命を果たしています。

②診療報酬請求を支援する商用ソフトウェアの導入とともに、京大病院独自のニーズに対応したソフト開発にも取り組み、臨床現場ならびに請求事務の負担を軽減しています。

③診療科ヒアリングや各種委員会などを通して各診療科に診療報酬関連情報を包括的にアナウンスする一方で、日々の臨床事例にまつわる診療報酬上の疑問には個別に対応し、現場と密に連携しています。

医療開発管理部 Research & Development and Corporate Integration

新規な医療シーズの産学官連携促進活動

新規で有用な標準医療を開発するための活動において、研究者と企業および政府機構との橋渡し役を、探索・創薬型初期臨床評価の実施の面から展望します。業務は京大医学領域の研究成果の発掘・権利化、その研究進捗管理、医師主導の初期臨床試験・治験の促進と、産学官連携による、新規で有用な標準医療化を目的にしたライセンス・共同研究・技術移転促進、研究成果の国際連携促進などです。

部の体制

学内の産学官連携に関する諸部門との連携が緊密に図れるよう、当部の部長は、京大産官学連携センターのスーパーアドバイザーと文部科学省産学官連携コーディネーターを兼任しています。

事業内容の特徴と実績

①新医療シーズの発掘と研究主題進捗管理
臨床評価を展望し得るバイオ医学シーズを発掘し、その実用化までの開発スケジュールを含んだ管理を研究者とともに約60主題について行っています。

②医師主導の治験・臨床試験の促進
前臨床・非臨床データおよび臨床試験用サンプルの安定的な製造・供給ルートを整備。医師(医療機関)主導の治験・臨床試験体制の構築活動に参画し、企業との必要な共同連携・契約折衝を担当しています。

③参入障壁
知的財産の取得、生物学的基礎データおよび臨床データの蓄積、許認可や承認の取得を目的とした厚生労働省・FDA・EMEAとの折衝などを通じ、当該研究成果の参入障壁が高まるための諸策を講じています。

④技術移転促進・研究資力・産業化
バイオ医薬品企業の共同研究参画折衝・ライセンス折衝を行い、研究資力の導入と確かな産業化を促進します。

⑤国際活動・「学・学・産・官」国際連携
トップレベルの医学研究をもとにした国際「学・学」連携に当該国の「産・官」からの参画を招き、新規で有用な新医療技術の国際的な標準化を図っています。

これらの活動により、大学の第三の責務である「大学の研究成果の社会への還元」と、附属病院の基本方針の一である「新医療技術・新医薬品候補の標準医療化活動」に資する所存です。

■ がんセンター　Kyoto University Hospital Cancer Center

叡智を結集してがんの克服に挑む！

診療科の枠組みを超えて、がんの集学的治療をめざしています。個々のがん患者さんに対して、複数の診療科の医師が一堂に会し、
さらにがん専門看護師、緩和ケアチーム、がん診療支援チームも加わって、最も適切な治療を検討し実施します。
また臨床試験にも積極的に取り組み、京都から新しいがん治療を発信していきます。

体制

京大病院がんセンターは外来がん診療部、入院がん診療部、がん診療支援部（緩和ケア、がん相談）、がん医療開発部、がん教育研修部の５部門からなり、治療方針決定から治療後の社会復帰、終末期医療の支援までトータルなケアを提供します。同時にがん医療専門職の教育養成、新しいがん医療開発を行います。

対象疾患

前立腺がん、脳腫瘍、乳がん、食道がん、肺、中皮腫がん、膵臓がん、頭頸部がん、胃がん、大腸がんの９ユニットに加えて、肝がん、胆道がん、婦人科領域がん、腎がん、血液腫瘍、小児腫瘍、骨軟部腫瘍など、すべてに対応しています。

診療、研究実績

一般的な診療についての実績

①がん外来ユニットでは、臓器がん別に、内科系、外科系、放射線治療科、薬物療法専門家による診療ユニットを編成し、新患患者さんに対して最適な治療方針を決定します。
②入院がん診療部では、複数の診療科が一緒になって集学的がん治療を行います。
③がん診療支援部では、患者さんの緩和ケア（痛みへの対応など）や精神的ケアを支援します。
④同時に京大病院の全診療科が協力して、他の病気や合併症をもつ患者さんの治療、薬物の副作用に対する対応などを行っています。

先端医療機器開発・臨床研究センター　Clinical Research Center for Medical Equipment Development (CRCMeD)

革新的な診断・治療機器創出拠点

医療機器の臨床研究から薬事申請まで一連の流れを迅速かつ適正に実施し、革新的な医療機器を継続して創出する本格的な産学連携拠点として、社会に大きく貢献します。

体制

センター長（病院長の兼務）、副センター長及び医療機器開発支援室長により構成しており、研究プロジェクト部門、高度人材養成部門及び産学連携オフィスを設置しています。

- 研究プロジェクト部門には民間等との共同研究等のプロジェクトから構成します。プロジェクトごとにプロジェクトリーダーを置きます。
- 高度人材養成部門には部門長を置き、副センター長が兼務します。
- 産学連携オフィスには自治体等の団体オフィスから構成し、団体ごとに代表者を置きます。

活動

- 各研究プロジェクトから生み出される革新的な医療機器を速やかに実用化するとともに、医療機器開発を担う人材の育成を行います。

リウマチセンター　Department of the Control for Rheumatic Diseases

集学的治療でリウマチ性疾患の克服をめざす

内科・整形外科共同で、リウマチ性疾患の診療を目的とした新しい診療科です。生物学的製剤（抗体製剤・レセプター製剤）を含めた内科的抗リウマチ薬治療から手術（図）、リハビリテーションまでの集学的治療を患者さんに提案していきます。

診療体制

日本リウマチ学会リウマチ専門医また日本整形外科学会専門・リウマチ医資格を有する医師4名でチーム医療を行うリウマチ診療科です。京大病院 免疫・膠原病内科および整形外科との連携の元に診療します。

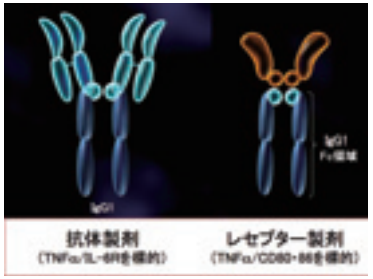
対象疾患

関節リウマチ、および原因不明の持続性関節痛をきたす疾患（一部膠原病も含まれます）を診療します。特に発症早期の関節リウマチは「寛解」あるいは「治癒」に導くことができるよう積極的に治療いたします。

診療、研究実績

一般的な診療についての実績

平成23年度新設の診療科で過去の実績はありませんが、京大病院 免疫・膠原病内科、整形外科で研鑽を積み、かつ研究実績を有する臨床医が共同して診療に当たります。今後、近隣の病院・診療所と積極的に連携をとり、京都近郊の関節リウマチ診療の充実に取り組みます。

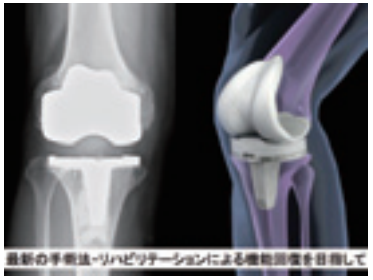


高度医療の取り組み・研究

①「目標達成に向けた治療（Treat to Target）」の実践
明確な治療目標（寛解あるいは低疾患活動性）にむけて生物学的製剤を含めたタイトコントロールを行い、残存する関節炎に対しても積極的な局所治療を行います。

②新しい治療へ向けた関節リウマチの病因に関する研究
関節リウマチの発症には遺伝的素因と環境因子の両者が関与するとされます。多くの患者さんの診療を通して病因・病態解明に取り組んでいき、新しい治療開発へと結びつけていきます。

①新しい手術治療の開発と臨床応用
これまで確立された最先端の手術を正確に行いながら、よりよい新たな手術治療を開発し、患者さんの生活の改善に役立てていきます。



病院運営企画室　Office for Hospital Strategic Planning

大学病院の使命を実現するシンクタンク

財政や政策をはじめとした医療を取り巻く環境の変化とともに、医療サービスへの国民の期待はますます多様化しています。病院運営企画室は、経営基盤の安定を通じて大学病院としてより高度な医療サービス・医学研究・医学教育の実現をめざす院内シンクタンクの役割を担っています。

体制

経営担当副病院長を含む教員5名および経営管理課事務職員で構成する、常設の病院長諮問機関です。週一回の定例会を中心に、総合的な病院機能の向上に寄与する計画を策定しています。

活動内容

①財務分析および業務・市場分析に基づく各種の経営に関する予測を行っています。これらに基づき、病院長の諮問による経営計画を立案します。また、分析および予測に必要な調査・研究も行います。各種経営管理指標の調査・設定・分析を行い、これらに基づく病院経営に関する企画立案をしています。

②経営安定に不可欠となる病床稼働率向上のために、ベッドコントロールセンターの創設を提案し、活動を支援しています。

③診療科ヒアリングを企画・管理し、病院執行部からの要請を各部局に伝え、また各部局のニーズを汲み、病院執行部などに伝える役割を担っています

事務部　Administration Office

病院のすべての業務をスムーズに

事務部では、患者さんの診療に関することから、医薬品、医療機器の購入、建物の維持管理、職員に関することなど、さまざまな事務処理を行っています。

■総務課

職員の人事労務・労働安全や給与、宿舎関係、共済組合関係、健康保険などに関わる事務からマスコミによる取材の窓口、研修医などの募集、受入れ、研修支援などに関することまで幅広い事務を行っています。

■経営管理課

病院の予算および決算、年度計画、自己点検・評価、病院経営効率化のための企画立案、総合医療情報システムの管理・運用に関する業務を行っています。

■経理・調達課

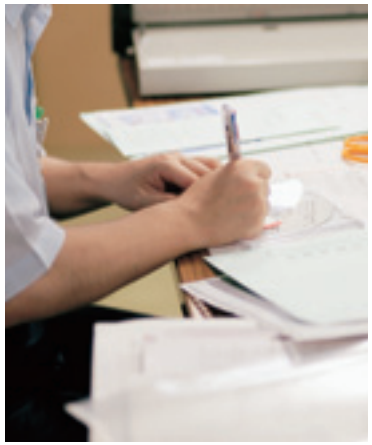
医療機器、医薬品、医療材料などの購入、寄附金、受託研究、共同研究などの外部資金の受入、管理、探索医療センター、環境保全、建物の維持管理などに関する事務を行っています。

■医療サービス課

医療法に基づく構造設備申請、施設基準届出、診療情報開示、病院ボランティア、病院臨床倫理、患者相談、医療安全管理、診療費の収納・療養費債権管理に関する事務を行っています。

■医務課

患者さんの診療にかかる、受付、診療報酬請求、診療録の管理、公費負担医療・労災、地域医療機関との連携、各種報告を含む統計、患者相談などの業務を行っています。



■新病院整備推進室

新病棟の実施計画の立案、年次計画、債務償還計画などを検討しており、京都大学耐震化方針に則り、安全・安心な病院環境の整備を進めています。

院内施設のご案内 48
構内配置図 50
交通機関のご案内 52

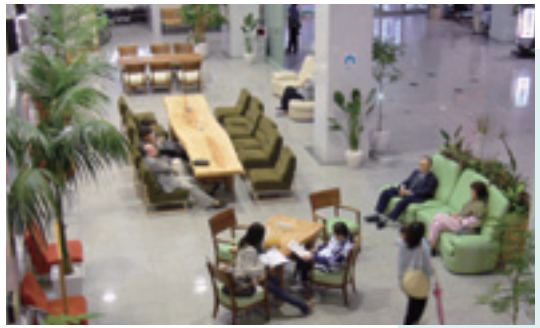
■院内施設のご案内

誰にとっても、より快適に、便利に。

郵便局、ATM、院内学級に各種売店・コンビニエンスストアやコーヒーショップなど、日常生活と同等の機能・設備の中で入院中の患者・家族の方々や、外来、お見舞いの人たちに、やすらぎと安心を提供し、ほっとするひとときを味わっていただける空間になっています。

正面玄関

外来診療棟アトリウムホール



ウェルネスエリア

彫刻「母子像」（作:斎藤 素巌）北病棟2F

外来診療をもっと快適に。

待ち時間を短く、手続きを簡単にするための設備と、親切に対応するスタッフをバランスよく配しています。

お薬お渡し口

総合案内

総合受付

潤いのある空間のために。

くつろいだ雰囲気と癒しの環境を提供します。

ホスピタルストリート

彫刻「生きるかたち」
（作:濱田 亨）

待合室

車いす

レストラン

コーヒーショップ

普段と同じように。 理容室／美容室／ATMなども備えています。

入院生活を普段と同じくらい気兼ねなく、不便のないものに。
そんな設備とスタッフを充実させています。

本の広場 外来診療棟3F

院内学級 外来診療棟3F

コンビニエンスストア 外来診療棟地階

郵便局 外科診療棟1F

プレイルーム 北病棟3F

花店 北病棟地階

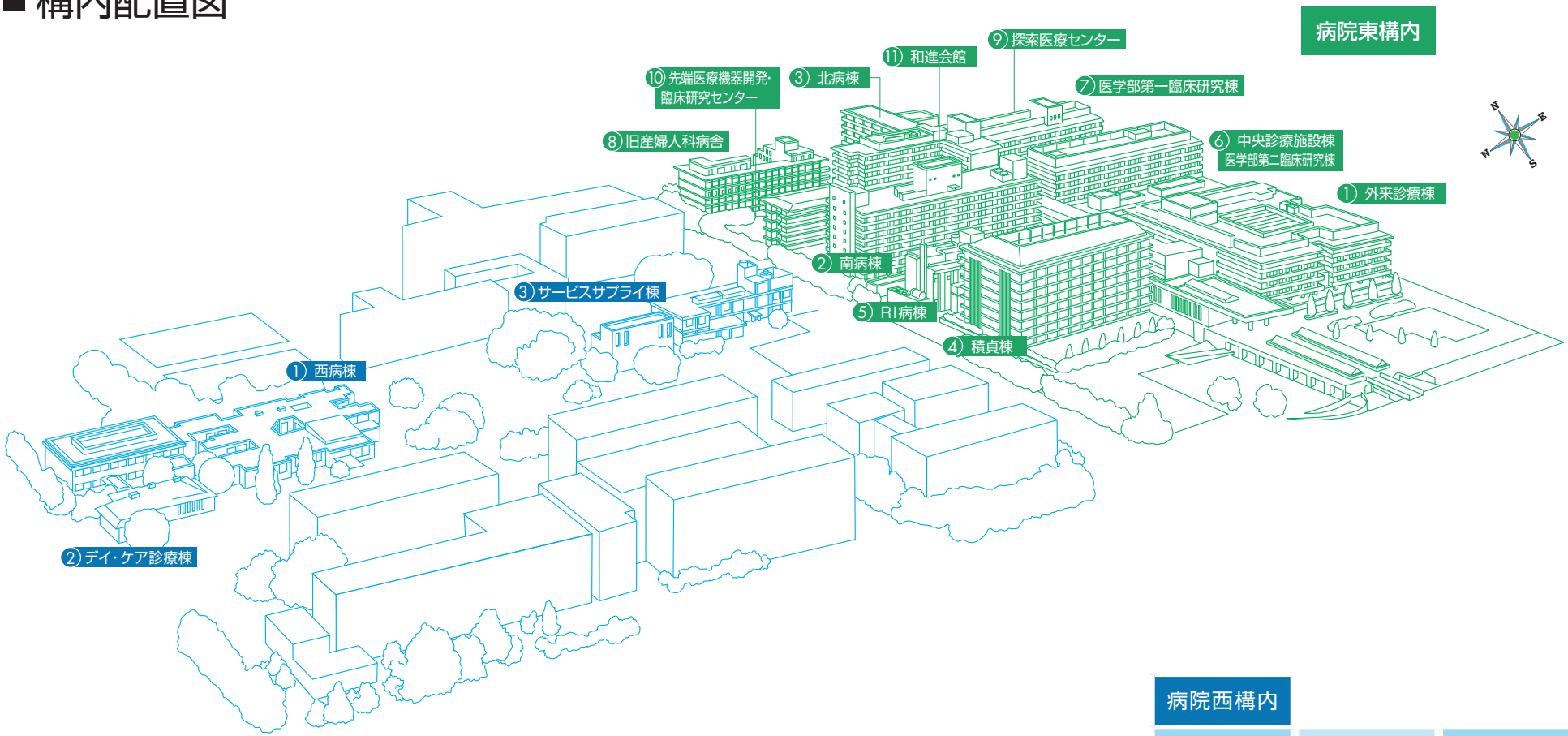
院内ボランティア

京都大学医学部附属病院では、ボランティアの方による活動も活発に行われています。
活動内容は大きく3つに分類されます。

①病院内の案内･誘導、診療手続きの説明など、外来患者さんへのボランティア。
②車椅子の方の移動のお手伝いなど、入院患者さんへのボランティア。
③外来棟3Fの図書コーナーでの、貸し出しカウンター業務、寄贈図書整理などを行うボランティア。

このほかにも、小児科病棟に入院中の子どもたちとその家族に楽しく豊かな時間を提供するボランティアグループ「にこにこトマト」があります。

■ 構内配置図



病院西構内

西病棟

デイ・ケア診療棟

病院西構内

精神科神経科（研究室）		新病院整備推進室 経理・調達課 （施設系事務室）
精神科神経科 （外来部門を含む） 医務課	デイ・ケア診療部 精神科作業療法	
①西病棟	②デイ・ケア診療棟	③サービスサプライ棟

病院東構内

	①外来診療棟	②南病棟	③北病棟	④積貞棟	⑤RI病棟	⑥中央診療施設棟（BF～4F） 医学部第二臨床研究棟(5F～8F)	⑦医学部第一臨床研究棟	⑧旧産婦人科病舎	⑨探索医療センター	⑩先端医療機器開発・臨床研究センター	⑪和進会館
8F		眼科 麻酔科	糖尿病・栄養内科学研究室 呼吸器外科学研究室	泌尿器科		眼科 小児外科 肝胆膵・移植外科	皮膚科 形成外科				
7F		耳鼻咽喉科	臨床免疫学研究室 呼吸器内科学研究室	消化器内科		消化管外科 整形外科 乳腺外科	血液・腫瘍内科 消化器内科				
6F		神経内科 婦人科	内分泌・代謝内科 老年内科 腎臓内科	消化管外科 乳腺外科		心臓血管外科 産科婦人科 耳鼻咽喉科	内分泌・代謝内科 消化器内科				
5F	病院長室／事務部長室／総務課／経営管理課／経理・調達課／安全衛生管理室／看護部長室／看護部管理室／会議室／Ｅ－テレカンファレンス室	肝胆膵・移植外科 歯科口腔外科	循環器内科 皮膚科	呼吸器内科		心臓血管外科 泌尿器科 脳神経外科	循環器内科 消化器内科	医療情報部		カンファレンスルーム	
4F	消化管外科／乳腺外科／肝胆膵・移植外科／小児外科／呼吸器外科／麻酔科／心臓血管外科／形成外科／医療安全管理室／内視鏡部／デイ・サージャリー診療部／女性のこころとからだの相談室	肝胆膵・移植外科 心臓血管外科 高度治療部(HCU)	神経内科 皮膚科 形成外科	呼吸器外科 呼吸管理睡眠制御科 （呼吸器内科）		集中治療部 手術部	老年内科 神経内科	病理診断部 内視鏡部 救急部			
3F	眼科／産科婦人科／泌尿器科／小児科／皮膚科／耳鼻咽喉科／超音波検査センター／人工内耳センター／黄班疾患治療センター／院内学級／本の広場「ほっこり」	初期診療・救急科 脳神経外科	小児科 小児外科	血液・腫瘍内科	放射線部 （RI検査室）	手術部 人工腎臓部 輸血細胞治療部 リハビリテーション部 分子細胞治療センター	小児科 麻酔科	探索臨床腫瘍学講座 脳機能総合研究センター 病理診断部 呼吸管理睡眠制御学講座 リウマチ性疾患制御学講座	探索医療センター		
2F	血液・腫瘍内科／内分泌・代謝内科／老年内科／免疫・膠原病内科／糖尿病・栄養内科／神経内科／消化器内科／呼吸器内科／腎臓内科／循環器内科／脳神経外科／歯科口腔外科／遺伝子診療部／中央採血室／尿検査室	整形外科 リウマチセンター	産科婦人科 周産母子診療部 新生児集中治療部	がんセンター 放射線治療科 集学的がん診療病棟	放射線部 （RI検査室）	検査部 病理診断部 感染制御部 病棟薬局	歯科口腔外科 検査部	リハビリテーション部 薬剤部 輸血細胞治療部	探索医療センター		総合臨床教育・研修センター
1F	初期診療・救急科／整形外科／リウマチセンター／放射線診断科／外来がん診療部／地域ネットワーク医療部／薬剤部／総合受付／入院受付／医療サービス課／医務課／総合案内／お薬お渡し口／院外処方せんコーナー／栄養指導室／郵便局／レストラン(ファミールダイニング)／コーヒーショップ(ドトールコーヒー)	内分泌・代謝内科 免疫・膠原病内科 心臓血管外科集中治療部 リウマチセンター キャッシュコーナー （京都中央信用金庫）	糖尿病・栄養内科 呼吸器内科 結核病棟 （呼吸器内科） 放射線治療科	がんセンター 放射線治療科 外来化学療法部 外来がん診療部 がん相談支援室 薬剤部	放射線部 （RI検査室） RI検査受付	Ｘ線受付 放射線部インフォメーション 救急部	放射線治療科 放射線診断科	RI実験施設 脳機能総合研究センター	探索医療センター	管理事務室	総合臨床教育・研修センター
BF	放射線部（ＭＲ検査室・骨密度測定検査室）／薬剤部／ローソン／薬店／理容店／美容室／病歴管理室／医療器材部／医務課	医療情報部 経営管理課	売店／花店	疾患栄養治療部	放射線部 ベビーサイクロトロン室	高圧酸素治療室 放射線部 疾患栄養治療部 医療器材部 経理・調達課	講堂 セミナー室	脳機能総合研究センター			福利厚生施設室

■ 交通機関のご案内

■京都駅(D2バスのりば)から

市バス 206系統 東山通「北大路バスターミナル」行き

■阪急河原町駅(四条河原町バス停)から

市バス 201系統「祇園・百万遍」行き／ 203系統「祇園・錦林車庫」行き／
31系統 東山通「高野・岩倉」行き

■地下鉄東山駅(東山三条バス停)から

市バス 201系統「百万遍・千本今出川」行き／ 202系統「熊野神社・西ノ京円町」行き／
203系統「東天王町・錦林車庫」行き／
206系統 高野「北大路バスターミナル」行き／ 31系統 東山通「高野・岩倉」行き

いずれも熊野神社前下車

京都大学医学部附属病院
〒606-8507 京都市左京区聖護院川原町54
TEL ／ 075-751-3111（代）
http://www.kuhp.kyoto-u.ac.jp

平成23年6月発行

KYOTO UNIVERSITY HOSPITAL